

1	1
学	国

小国518

国

語

十

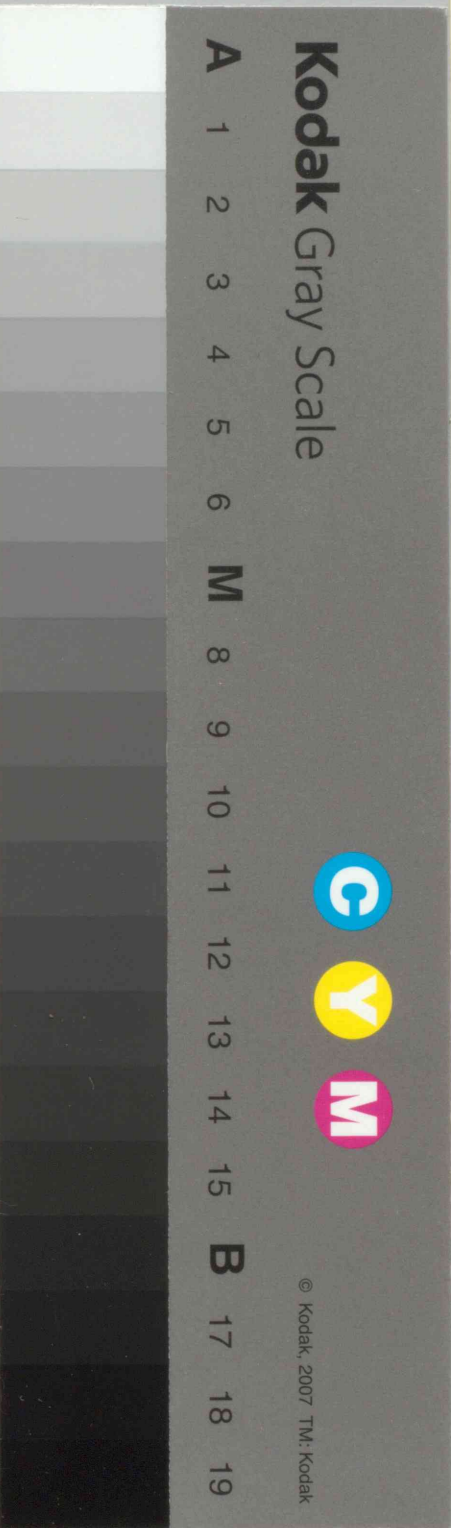
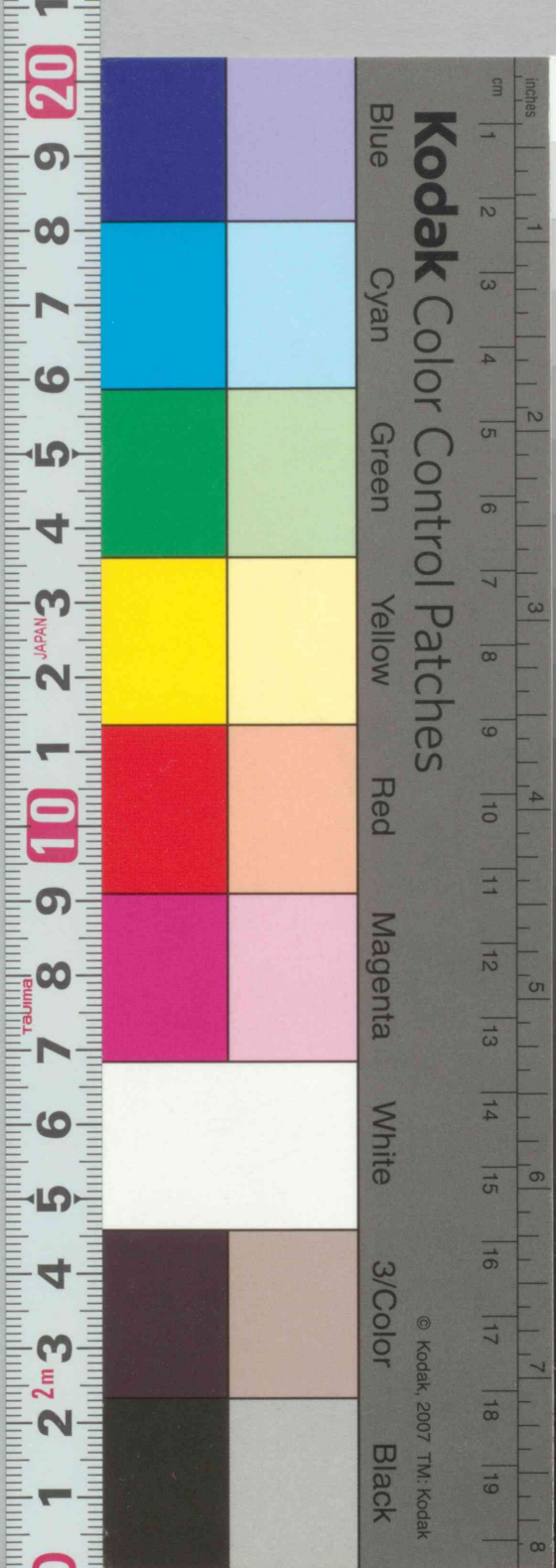


教育部  
資料  
財団法人  
文部省  
検定教科書  
日本新  
教育研究  
会編修

KC  
G16

学校図書株式会社発行

教  
3  
01



60379

教科書文庫

6

816

34-1950

01304  
49670

34-1950



広島大学図書

0130449670



教科書文庫

6

810

34-1950

0130449670

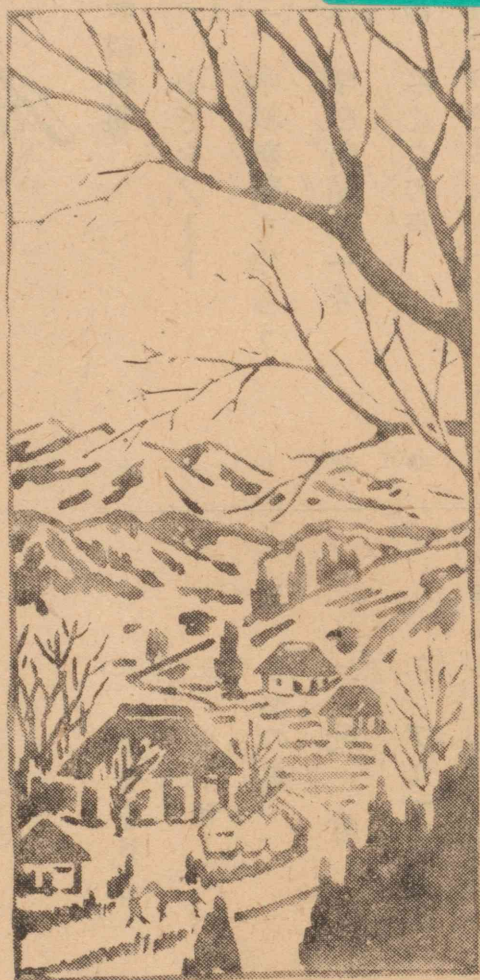
寄贈

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

国語十



第五学年用下巻

学校図書株式会社

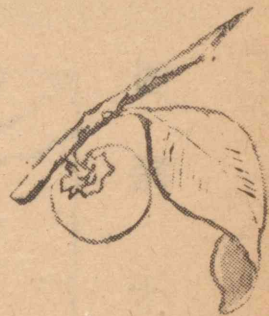
広島大学  
教育学部図書

中央図書館

広島大学図書

0130449670





も  
く  
ろ  
く

一 学級新聞

- (一) 小さなノート 4
- (二) 学級新聞を作ろう 6
- (三) 学級新聞第一号 12
- (四) みんなの声 28

二 科学の世界

- (一) 小さいころのファールブル 33

三 自然の美

- (一) 初雪 62
- (二) クモを見る 43
- (三) ルーサー・バーバンク 51

四 わたしたちの劇

- (一) とし子の劇 83

- (二) アルプスの山のむすめ 72

五 学校ものがたり

- (二) 助けあい 88
- (一) うつりかわる 104
- (二) 学ぶ心 110
- (三) 話す喜び 114

六 前進

- (一) 北極へ 124
- (二) そりに乗って 129

七 わたしたちの研究

- (三) 平和のために (16) 136
- 学習の手引 (8)
- 漢字 (7)
- 新しく出たことば (1)



あそび

(一) 小さなノート

としおのポケットには小さなノートがはいっています。ひよ  
つと思いついた時、すぐ書けるようにしています。かんたんな  
絵をかくこともできます。

九月二十日

先生のつくえの上の花、  
きれいな花、アカマンマ



よく見ていると、ほんとに  
イネがみのつているようだ。

九月二十二日

教室のガラスまどに大きなカマキリがのそのそと歩いてい  
びっこをひきながら、大きなおなかを引きずって。ただしくん  
がちよつとさわったら、おこってはねをひろげて、わたしたち  
をにらんでいた。



九月二十三日

午後、四年以上は大川へすなを取りにいった。まさるくんた  
ちと五人でリヤカーを引っぱっていった。川原で少し遊んでか  
ら、すなを取った。すなはなかなか重いものだ。学校へ持ち帰  
って、すな場に入れた。余るほどある。飛びこんだら、ずぶつ

と足がめりこんだ。

(二) 学級新聞を作ろう

としおの組では、きょうの自治会の相談で、学級新聞を作ろうという問題が出ました。

新聞は今までも出されてきました。それはすきな人がグループを作って書いたかべ新聞です。としおはかべ新聞のなかまにはいつていました。そのかべ新聞をみんなのものにして、学級新聞にしようというのは、まえまえからのとしおたちの考えでした。

学級新聞を出すについては、みんな賛成でした。そうして、

新聞委員が選ばれました。

委員たちは、放課後相談をしました。

(1) 新聞は何のために作るか。——これは、むずかしい問題で、いろいろ意見が出ましたが、それらをよく考えて、発行のあいさつの中に入れることにしました。

(2) どんな内容を入れたらよいか。——知識、ニュース、報告、自治会での約束、文芸、科学、図画、工作、ごらく、投書、などにまとまりました。しかし、これらは全部のせなくともよい。ただ、一方にかたよらないように集めようということになりました。

(3) 委員の分たん

記事を書くもの……四人、ほかに組の人にもたのむ。

編集をするもの……三人

字やかなづかいの誤りをなおすもの……二人

印刷するもの……三人

仕事全体について、みんなの相談をうけたり、先生に連らくしたりする係も必要だというので、としおが選ばれました。としおは、記事の係でもあります。

(4) 発行の時期——毎週一回 月曜日

(5) 発行の部数——組の者全員分、先生の分、そのほか十部ぐらい余分に作る。

つぎの週の水曜日に、第一回の編集相談会を開きました。初めてのことなので、委員たちは全員集まりました。初

編集係のしげるが、大きなふうとうから、集まった原こうを取り出しました。印刷係のただしが、

「うわー、ずいぶん多いな。刷るのがたいへんだ。」

と、目をまるくしました。

編集係が、これはよい記事になると思った原こうについて話しあいをすることにしました。

### 新しい校舎

庭の西側に校舎が建ち始めました。土台石をたくさん入れています。あぶないから、近よらない方がよいと思います。

(ながさわ)

「もつと、くわしく書いたら、どうだろう。」

「いつごろまでに、できあがるかも調べたら。」

「新しい教室には、何年がはいることになるの。」

「先生に聞いてみれば、わかるよ。」

「工事場のおじさんは、すなや石の積んである所に乗らないようにと言っていたよ。こんなことも書いた方がいいね。」

「じゃ、てる子さん、もう一度書きなおしてください。」

### 共同ぼ金

十月一日から、共同ぼ金が始まりました。今月一ぱい続けるのだそうです。はこをかかえた人が、駅や人通りの多い所で、声をからしてよんでいます。ぼくもきのうおこづかいの中から、十円寄付しました。そうしたら、女の人が、ぼくのむねに赤いはねをつけてくれました。なんだかはずかしいような気がしました。

「ニュースとしてはたいへんいいと思うね。」

「何に使うのかわからない。」

「それに、どのくらい集めたらいいのかも、書くといいね。」

「あどの方にたけだくんのことがはいつている。ニュースとしては、あまり書かない方がいいと思う。」

「共同ぼ金でもいいが、赤いはねという見出しではどうかな。」

「それはいいね。見出しはなるべくおもしろく書こうよ。」

こうして、原こうについて話しあいを進めました。だいぶおそくなりました。原こうの書きかたについては、編集係から、ひひょうや希望を組の人たちに話してもらうことにしました。

(三)

学級新聞第一号

第一号を送ります。

今までは、わたしたちは、かべ新聞を作っていました。けれど、全員の協力で学級新聞を出すことになりました。

この新聞によつて、世の中や学校のできごとを知ったり、めいめいの考えを発表したりして、わたしたちの生活をりっぱなものにしていきましょう。

記事は、なるべくわたしたちの生活に関係のあるものを材料にしていききたいと思います。組全員が記者になって、おもしろくてためになる記事を書いてください。

(新聞班一同)

週間ニュース

来た来た ララのウシ



ララのこう意で、たねウシ十五頭がこのほどよこはま(横浜)に着きました。

ブラウン・スイス種といつて、にゆう牛としてからだが大大きく、ちちにしばう分の多いのが、特ちょうです。

来るとちゆう船の中で予ウシが生まれ、予定より一頭多

くなったことはおめでたい話。

暑いインドから、海路はるばるゾウがおくられて来ました。インデイラというめすのゾウです。九月二十四日午前十時出発して東京のしばうら(芝浦)に着きました。インドのカルカツタを出発してから、二十八日目だそうです。

インデイラさんは、首にぶらさげた黄色いすずをチロン



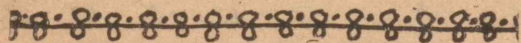
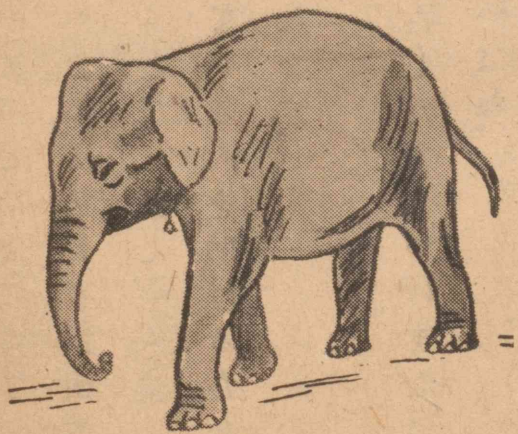
チロンと鳴らしながら、芝浦から上野の動物園まで歩きました。子どもたちは、大喜びで、インデイラさんをむかえました。次の手紙は、ゾウをおくってくれたインドの首相から日本の子どもたちへあてたものです。

あなたがたがほしがっていたゾウをおくることができて、たいへんうれしく思います。みなさんは、このゾウをわ

たしからのおくり物と思ってはいけません。インドの子どもたちからみなさんへのおくりものとして、またなかよしの使者として受取ってください。わたしたちはけんかをなくしてしまわなければなりません。インドと日本の子どもたちが大きくなった時には、おたがいの国につくすばかりでなくアジア全体、世界全体の平和と協力のためにつくし

てください。インデイラは東京でひとりぼっちになり、さびしがって友だちを欲しがるかもしれません。もしみなさんが、お望みなら、インデイラの友だちになれるゾウをもう一頭送ってあげることでもできるでしょう。ゾウは、インドでは、たいへん愛され、そして、インドという国の持ちようをよく現わした動物です。ゾウはりこうで、にんたい強

く、また力は強いのに、やさしい性質を持っています。みなさんに心からのあたたかいあいさつを送ります。





### むねに赤いはねを

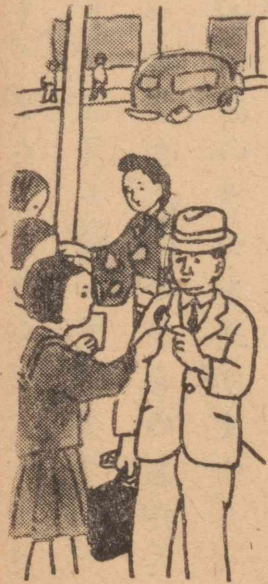
十月一日から愛の運動の共同ほ金が始まりました。これは十月いっぱい続けられるそうです。駅前や人通りの多いところで、ほを持った人が、「共同ほ金にご協力ください。」と人々によびかけています。寄付をした人のむねには、美しい赤いはねがつけられます。ことしのほ金の予定は十二

### 新しい校舎

九月の末に着手された、二むね四教室の工事は、もう土台ができあがりました。先生の話によると、十二月の初めには完成するだろうとのことです。この新しい教室に、はいるのはだれでしょう。今、北側の教室を使っている組がはいることになっているそうです。わたしたちもそのなかまです。

億二千万円とのことでした。集まったお金は社会事業団体に分けられて、貧しい人や、こまっている人を助けるために使われます。

わたしたちもつけましよう  
赤いはね。



仕事場のおじさんから、みなさんへのお願い  
仕事場には近寄らない  
てください。ボールが飛んで  
来たら、拾ってあげますから、  
はいらないようにしてください。  
まわりの石やすなになら  
ないように願います。  
一日も早くわたしたちの教  
室ができるように。



	敬
ま	室
ど	の

◎小川さんおめでとう。

先ごろ、消防についての作文や図画のぼ集がありました。学校では、わたしたちの作品の中から、おのおの十ずつ選んで、出しました。

このほど、その審査の結果が発表になりましたが、小川さんの作文「あるばんのこと」

◎たん生会

今月のたん生会は来週の水曜日午後二時半からときまりました。よきように出演したい人は、団体個人ともこの水曜日までに名まえ、種目、題、時間等を書いて、たん生会委員へ出してください。

◎鉄ぼうに注意

朝、すな場で、さわいでいるので、いって見たら、山田

がみごと一等になりました。近く、ごほうびがくるようですが、さて何がくるでしょう。

◎フレイフレイ一組チーム

今週の土曜日、二組チームと野球のしあいをする事になりました。一学期には、七対六でおしくも敗れました。

こんどこそは、ぜひ勝ちたいものです。みなさんのおうえんをお願いします。



します。



くんが、小さい人たち大ぜいに手足を持たれて、かつがれている。聞くと、鉄ぼうから落ちて動けなくなってしまうのだそうだ。ぼくも心配になつて医務室へ連れていった。たいしたことはなかったようだが、みんなも落ちないよう気をつけよう。



### わたしたちの声

□ 自治会の討論や相談の時は、だまっけていて、あとになってぐずぐず言う人が見うけられる。また、じぶんの意見が通らないと、休み時間に反対側の人に文句を言う人もある。

これでは、ほんとうに自治会をやったことになっていないと思う。意見があつたら、その時にどんだん発表しなければならぬ。そうして、じぶんの考え通りにならなくても、みんなでいちど決めたことは、ぐずぐず言わずそれに従おうじゃないか。

□ 運動場で、キャッチボールをする人は、いつも場所と方向を決めて、一か所でやって欲しい。思い思いの場所でやってい

るので、ほかの遊びをしているものは、とてもこまっけている。下級生なんかは、びくびくしながら遊んでいるようだ。



今年はずつマイモの当り年で、みなさんの畑や家庭菜園にも大きいおイモがたくさんできたことでしょう。

ちばけん(千葉県)のあるおひやくしようさんはずつマイモを多く取る方法を研究中でしたが、このほどその結果がわかりました。それによると一本のイモなえから六十二以上もできたのもあります。だいたい一本から十四キログラム以上も取れ、中には一つで、一・五キログラムもある大きなのもできたそうです。種類はおいしい農林一号ということでした。

詩

あたたかい日

あたたかいえんがわ。  
ぼかぼかした日が  
わたしをふくらますように照  
る。

ざぶとんの綿が  
ふわりと

飛びそうに軽い。

ふくらんだざぶとんへ

乗ったら

軽くおどっているようだった。



くらご  
く  
室



○わらい話

弟「にいさんたらずるいや。」

半分わけとといったのに、

じぶんで分けて、大きい

方取ってしまうんだもの

兄「じゃ、おまえならどうす  
る。」

弟「ぼくなら、大きい方を  
いさんにあげるよ。」

兄「そうだろう。だから、ぼ

くが大きいのをもらった

んだよ。」

ある人「ははあ、これがせん風機

というものか。なるほど、

こんなに風があるんだか

ら回るわけだ。」

とん子「おかあさん、電報がきま

したよ。」

おかあ「そう、どこからでしょう。」

とん子「ゆうびん局からよ。」

話の泉

(1) つぎの品物は日本のおとぎ

話の中に出てくるものですが、さて、そのお話は？

はさみ

はり

つりざお

ほうちよう

ざる

はらがけ

火うち石

おにぎり

茶がま

(2) スポーツにはいろいろあり

ますが、次の人数でやるス

ポーツは何々でしょう。

ただし、相手の人数は入れ

ないことにします。

ふたり 三人

四人 五人

九人 十一人

一週一話

王様と学者

むかし、ギリシヤにディオゲネスという学者がいた。えらい学者だったが、ずいぶんふつうの人とちがったところがあった。ものを考えるのに、わざわざ夏はやけつくようなすななにねころがり、冬には雪の中に身をうずめて、考えたりしたそうさ。

ところが、ある春の日のことである。

かれはいつものように、日あたりのいい道ばたにすわりこんで、地面の一点を見つめながら、考えにふけていた。すると、ふいに目の前に、大きなかげがぬっと現われた。ディオゲネスが顔をあげて見ると、りっぱな服を着た王様が、大ぜいの家来を連れて立っていて、

「わしはアレキサンドル大王だが、おまえの名は——。」  
と、きいた。

「わたしは学者のディオゲネス。」

「ほほう。おまえが名高いディオゲネスか。」

王様はそう言いながら、ディオゲネスの

みすぼらしい身なりをあわれむようにな  
がめた。

「それならば、ディオゲネス。きよ

うは、ひとつ、わしはおまえの望

みをかなえてやりたいのだが——。」

「わたしの望みか。」

「そうだ。わしにできることで



おまえのいちばんしてほしい望みはないかな。」

「大ありだ。」

と、ディオゲネスはおこったように言った。

「それは何かな。」

「そこをどいてほしいんだ。——おまえさんが立っているんで、

わたしの所に日があたらないうんだよ。」

ディオゲネスが、かれの頭から地面にのびている王様のかげを  
指さして、こう言ったので、王様は思わず二三歩退いた。そし  
て、まもなく一礼すると、その場を去ったが、あとで王様はけ  
らいにむかって、言ったそうである。

「ああ、わしは、アレキサンドルでなければ、ディオゲネスに  
なりたくないものだ。」

(おかもと・よしおによる)

(四) みんなの声

先生「学級新聞第一号が出ましたね。みなさん、新聞班の人たちの努力にはく手をおくりましょう。第一号の評判はどうでしょう。これから、新聞班の人を中心に感想をのべたり、ひひょうをすることにしましょう。そして、第二号はもつとりつぱに作ってもらいましょう。初めに、記事についてはどうですか。」

としお「みんなのおかげで記事がたくさん集まりました。あまり多いので、のせられないものもありました。」

級友二「第二号へまわしたらどうですか。」

としお「よいものはそうします。」

級友三「スポーツ関係の記事がもつとほしいように思います。」

「わたしたちの作品も。」

としお「この次には、心がけます。はいくなどともいいと思いますから、できたら、出してください。」

級友二「わたしたちの声」では、だれだれが何をしたらと名まえを書いた方が、はつきりすると思います。」

としお「でも、名まえを出された人が、いやな思いをするから、やはり書かない方がいいと思います。」

やす子「一年生たちからも記事をとりたいと思いましたが、話がよくわからないのでこまりました。」  
「絵をもつと入れてください。」



「そう思ったのですが、記事が多くてね——」。  
「わりつけがむずかしくて、苦心しました。記事がはみ出してはいけないし、絵も入れたりして、カットを入れるのがやっとなかったです。」

先生印刷の方はどうですか。

「はじめのうち、インクのこいところとうすいところが出て失敗しました。あとでは、うまくいきました。」

「鉄ぴつて原紙を切るのが、たいへんです。手がいたくなりました。」

「見出しは、もつと太く書いたらどうですか。」

「字も大きく書いた方がいいと思います。」

「そうですね。見出しはすぐ目に立つように書くことですね。」

それから、見出しのことばは、何を言おうとしているか、読者の心をさそうようなくふうがいらいます。第一号もなかなか苦心しているようですが、これからも研究してごらんなさい。」

「こんどの記事は、みんなが出してくれたのをなおして出しました。ニュースには、何が、どこで、何を、どんなふう、に、何した。というようなことをはっきり書いてください。そして、編集係が手を入れなくてもいいような記事にして出してください。」

先生じゃ、第二号をたのしみに。きょうはごくろうさま。」

## 二 科学の世界

みなさんは、じぶんの足もとにある小さな草にどれだけ注意をはらっているでしょうか。まわりの小さな虫たちにどれだけ目を向けているでしょうか。平ぼんに見える草や花や虫の世界も、実はなかなかふしぎな世界なのです。

どんなものだろう、どうしてだろう、どうにかならないものだろうかと、頭を働かせたら、そこにすばらしい発見が生まれて来ないとも限りません。草や花の研究者であるルーサー・バーバンクは、小さい時に、散った花びらをなんとかもとどおりにできないものかと考えました。苦い、おいしくないトマトをおいしいものにしてくれたのは、このバーバンクです。

ミツバチは一日にどのくらい飛ぶのだろう。そんなに遠くまで飛んでいって、どうしてまたじぶんのすにもどれるのだろう。ファールブルの頭は、いつも虫のことについていっばいでした。ファールブルの「こん虫記」は、どこを開いてみても、おもしろいところばかりです。

このふたりのりっぱな仕事はどうして生まれたのでしょうか。草や虫に対する深い愛情とがまん強い研究からです。ふたりの伝記や、著書を読めば、みなさんはきっとそうだとうなずくにちがいません。

### (一) 小さいころのファールブル

ここは山おおくの一けん家で、目の届く限り家らしいものは見





口でかな。——  
目を開いて口をとじた。目を  
とじて口を開いた。  
—— そうだ。物が見えるのは、  
目があるからだな。ロじゃ物  
が見えないんだな。——  
遊びつかれて家に帰ったアン  
リは、この大発見を話した。す  
ると、みんなは、  
「それはあたりまえだよ。」  
と、言っただらう。

あたらないようなさびしい所であった。アンリ・ファールは  
小さい時に、こんな山おくのおじいさんのところに預けられた。  
アンリはさびしがりもせず、家のまわりをとび回って遊んでい  
た。そこには、ブタ、ガチヨウ、アヒル、ヤギなどがいた。親  
ブタのまわりには、十ぴきばかりの子ブタがブウブウ鳴いてい  
た。そばへ寄ると、子ブタはアンリに鼻をこすりつけた。

—— おや、冷たい鼻だね、これは。—— と考えた。

ニワトリ小屋はもつとにぎやかだった。ガチヨウはグエグエ  
とのどをふくらませて、ラツパをふいた。アンリは楽しさでむ  
ねがふくらんだ。

お月さまは空にかがやいている。

—— おや、お日さまは目があるから見えるのかな。それとも

学校にはいるころ、アンリはじぶんの両親のところにもどつて来た。貪しいアンリの家では、アヒルさえもかかっていなかった。メンドリは一わしかいなかった。その黒いメンドリと借りてきたメンドリとにアヒルのたまごをあたたためさせた。二十八日たつて二十四わのひながかえった。アヒルの子たちは黄いろいビロードの着物を着て、ちよこちよこ歩いていった。黒いメンドリは二十四わのめんどろをうるさがりもしないでみてやった。ひなは金だらいのへりにとび上がってうれしそうにさわぎまわった。メンドリはびっくりしてけたたましく鳴いた。そうして、水にたわむれるひなたちを心配そうに見守っていた。

半月もすると、もう金だらいの水遊び場ではひなたちは満足しなかった。アヒルが水にはいるのは、ただ水浴にゆくのでは

ない。何よりもえさをさがすためだ。ところが金だらいはぼうふら一ぴきもない。ひなたちは水に頭をつっこみ、おしりを空に向けてえさをさがしたいころになっていた。

アンリはそれを考えた。

—— いったいどこへ連れていったらよいのかなあ。——

これはちよつとやっかいな問題だった。このあたりは岩山で、木と水にとぼしいところだったから。こうしてアンリが見わたしたところにはひよこの欲しがっているようになかつた。こうな場所はなかつた。

いちばん近いのは、近所の家が飲み水をくみにいく、あの岩のくぼみだ。だが、あそこの水は五六けんでくめばもう残りが少なくなってしまう。そのうえ校長先生のロバが飲みに来たら、

それでおしまいだ。もうあくる朝まで待たないと水はたまらない。ずうつと下ったところには、小川が流れている。だが——あそこまでいくには、村を歩いていかなくちやならない。これは、少年にとっても、とりわけひなにとっても、たいへんな冒険旅行だ。そここの家のかけには、大きなイヌが待ちぶせしているかもしれない。ひなを見たら目のない、どらネコどももじつとしのんで待っているにちがいない。

そうすると、もうおしろのうらてを通過して、あの池までいくよりではない。石ころだらけで、歩きにくくはあるが、小川に出るようなきけんなことはない。

あくる日、アンリはアヒルの子たちを先にたてて、後からかた手にぼうを持ちながら、この山道を登っていった。はだしの

足に小石はいたかった。なお悪いことには、石につまづいて、血まめを作ってしまったことがある。これにさわると、飛びあがるほどいたかった。見ると、アヒルの子たちもいたそうだった。

足のいたい少年は、足のいたそうなアヒルをいたわりながら、木のかげに休み休み、やつと目的地に着いた。アヒルは水を見るところつかれも何もわすれてしま



った。われがちに水の中にとびこんでいった。小さな口をパクパクやってどろをかきまわしてごちそうをさがし、深いところでは、おしりを空に向けて底をさがした。

アンリもおもしろくてたまらない。水の上には黒いせなかをぴかぴかさせてくるくる回っている虫を見た。とらえようとすると、ついとどこかへいってしまふ。ほんとにすばしっこい。池のも草をどけて底を見ると、うずまき形の貝や、するどいかまを持った虫がいた。

アンリは水の落ちるところで水車を作った。一本の草のくきをじくにして、二本のくきを十字に組みあわせて石の上においた。勢いよく回る。だれかに見せてやりたいが、アヒルのほかにはだれもない。こんどはたきを作ろうと、石でせきを作っ

ている時、すばらしくきらきらしたものを見つけた。これはダイヤモンドにちがいない。おかあさんの指輪にあるのと同じだ。ポケットにはいるだけ入れた。水の中にも宝物があった。それは金の粉だ。水の落ち口ではうずをまいていた。これを取るのには全く苦勞してしまった。だが、両親をびつくりさせてやるうという気持でいっぱいだった。だから、帰り道はゆきよりもつ



と楽しかった。アヒルもおなかがいっぱいになったので、うれしそうにはしゃいで帰った。

家に着いて、父にポケットのものを見せた。

——しよのない子どもだな、ポケットに石をつめこんでもどるなんて、こんな石なら家のまわりにくらでもあるよ。アンリは悲しかった。母親までが、

——ポケットが破けてしまったよ。——と、もんくを言った。

だが、あの石はほんとは何なのだろう。池で見た虫は何という名の虫だろう、少年はふしぎでたまらなかつた。

あとになって水の上をくるくる回っていたのはミススマシ、ダイヤモンドに見えたのはスイショウ、金の粉はオウドウコウであることがわかつた。水の中の虫はタガメだつた。

これは、アンリ・ファールブルがまだ小さいころの話である。ファールブルが、このころから、身のまわりのものに、なぜだろう、どうしてであろうというような心を持ち、また動物をたいへんかわいがつてみていることがわかるだろう。

## (二) クモを見る

ジョロウグモは、昼の暑い時は、たいてい家の中にひっこんで、静かにしています。あみにえものがかかれば、どんな時でも、すぐにわかります。たとい月のないやみ夜でも。

クモの目はそんなにいいのでしょうか。わたしは、クモの目がそんなにずばぬけていいという話は、まだ聞いたことがあります。

ません。そこでまず、クモがほんとうにいい目を持っているかどうか、調べてみることにしました。

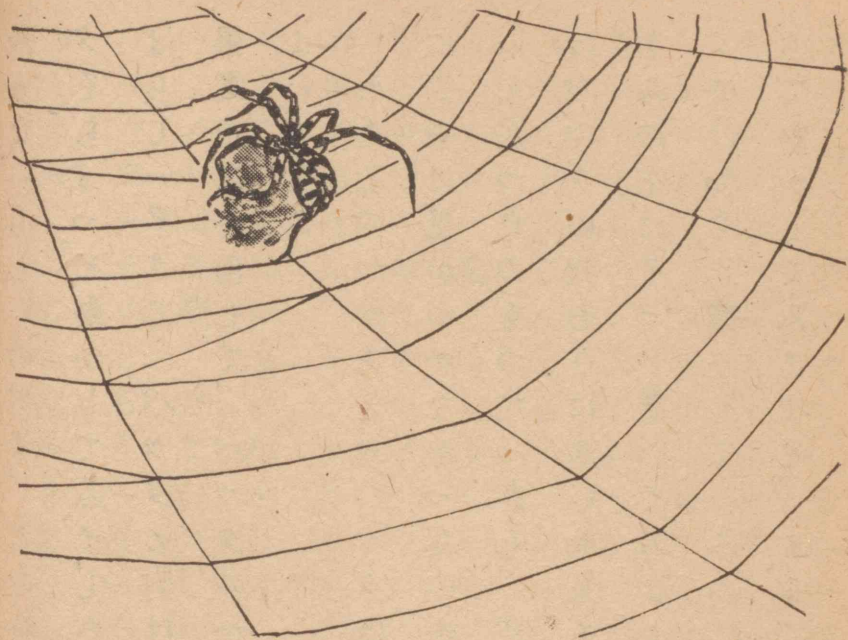
かわいそうですが、死んだバツタを一ぴきクモのあみの上に置いてみたのです。ちょうど、クモは、あみの真中に足を大きくひろげてじつとしていましたが、わたしがバツタをあみへ置いたのに、動こうともしません。あんまりじつとしていたのでクモのすぐ横へそつとバツタを置いてみました。やっぱりクモは動きません。とうとうクモの目の前へ置きかえました。それでも、クモは知らん顔をしていました。

こんどは昼間、クモがくれ家にひっこんでいる時に、死んだバツタをそつとあみへ置いてみました。クモは出て来ようともしません。こんなにうまいごちそうがかかったのを、少しも

知らないらしいのです。この時、わたしは長いムギわらでバツタをちよつと動かしてみました。と、どうでしょう。クモはすばらしい早さで、バツタめがけてかけつけました。そうして、得意の糸を出して、バツタのからだをぐるぐるまきに包んでしまいました。

わたしのつかまえたバツタは、はい色でしたから、そのためにクモは気がつかなかったのかもわかりません。もつと明かはいめだつ色のものだったら、どうでしょう。そこで、こんどはバツタの代わりに赤い毛糸をバツタぐらいの大きさにして、あみの上にそつと置いてみました。ところが、置いただけではクモは知らん顔をしているのです。そこで、前のようにムギわらで動かしてみますと、まるで電気に感じでもしたように、た





ちまちま走って来ました。クモは毛糸を足でちよつとさわったり、かみついたりしていましたが、そのうち、大急ぎで糸を出して、ぐるぐるまきつけしてしまいました。

「おやおや、なんてまぬけなんだろう。」

わたしはわらいだしたくなりました。どうもこのようすでは、クモは目がいいどころか、ひどい近眼です。こんな近眼では、

やみ夜にえ物をつかまえるなんて、とてもできっこありません。それでは、家の中にいながら、え物がかかったのがわかるのは、いったいどういうわけなのでしょう。何か、これには特別のわけがあるにちがいません。

ある日、わたしは、クモがかくれ家にひっこんでいる時に、あみをじつとながめてみました。そうして、おもしろいものを見つけました。あみの中心からかくれ家の中まで、あみの面にななめに一本の糸がひいてあるのです。

この糸は、何のために張ってあるのでしょうか。かくれ家からあみに走って来る時のつり橋になっていることはたしかですが、ただそれだけのために作ってあるのでしょうか。もし、それだけの用をするなら、このつり橋は、あみのいちばん上の方

にくつつけておいた方が近道なはずです。見ているうちに、わたしは思わず、

「なるほど、そうか。」

とうなずきました。とにかく、この線をクモにわからないようにそつとはさみで切りました。そして、ぴんぴん生きているバツタをあみの上にかけてみました。バツタはしきりに身をもがいてあべれますが、もがけばもがくほど、あみはねばってからだにまきついていきます。あみは大波をうってゆらゆらゆれます。ところが、のんきなクモさん、いつこうにかくれ家からやって来ません。あみへ来るつり橋がなくなつたからでしょう。そんなはずはありません。もし、ごちそうがあみにかかっていると知れば、糸はいくつもかくれ家からついているのですから、

すぐ来られるはずですよ。

一時間ばかりたちました。さつきから、じつとかくれ家の中にどじこもっていたクモは、どうやらあきたとみえてのこのこ外へ出て来ました。

「おかしいなあ。さっぱりえ物がかからないなあ。」

と思つて、あみの方を見ると、これはたいへん。

「やっ、線が切れている。これじゃ、え物がかかたつてわからないはずだ。」

クモはまず大急ぎでバツタを糸でからめてしまうと、切れたななめの線の修理にとりかかりました。それが終ると、クモはバツタをかくれ家まで運びこんでいきました。

もうおわかりになつたでしょう。このななめの線は、何より

もたいせつな電信線なのです。  
あみとかくれ家との間にかけられたこの電信線で、え物があみにかかったことが、すぐ報告されるしくみになっています。  
ぽかぽかとあたたかい春の日に、かくれ家の中のクモが、いい気持ちになって、こっくりいねむりをしていたとしても、もし、トンボがあみにかかって、あばれでもしようものなら、青葉に包まれたかくれ家まで、す



ぐに電報がとびます。

トンボ トレタスグ コイ

クモはゆめを破られます。ねむいなどとは言っていないせん。大急ぎであみの方へかけつけるのです。

まもなく、クモは、そのかわいそうなえ物を引っぱりながらかくれ家へもどって来るのです。

### (三) ルーサー・バーバンク

アメリカのうんだ植物界の恩人ルーサー・バーバンクは、七十七才の一生の間に、三千種以上の植物を改良し、数多くの新しい植物を作り出しましたが、その中で、日本にも関係のある

ものの一つに、シヤスター・デージーがあります。

まっ白いひとえの大輪の花、キクの花のように美しいシヤスター・デージー。

今では、どこの国にも作られているし、広く人々に愛されていますが、しかし、バーバンクが苦心して作り出したものだということは、あまり知られていません。

バーバンクは、これを作り出すために、まず、イギリス、日本、ドイツ、それからアメリカ四か国の野ギクを集めました。

花は小さくて少ないけれども、いかにも

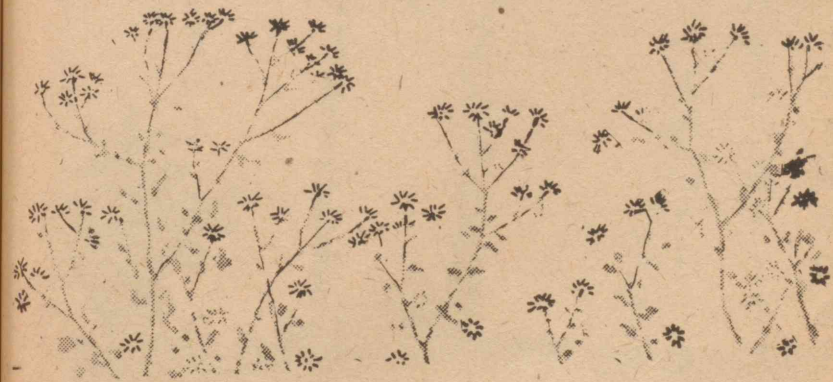
やさしいすがたのイギリスの野ギク。

雪のようにまっ白できよらかな、日本のコハマギク。

いろいろのよさを持っているドイツの野ギク。

色や大きさは少しおとるが、性質が非常にじょうぶなアメリカの野ギク。

もしも、この四種類の野ギクから、それぞれよい性質をとり入れて、新しいキクを作ることができたら、やさしくてすっきりしたくきに、大きくて雪のように白い花がさき、しかもそれが、じょう



ぶでどこにでも育つようなものが作り出せたら——それこそ、  
どんなにすばらしいだろうと、バーバンクは考えたのです。

こうして八年の苦心が始められました。

ところで、バーバンクの植物改良は、どんな方法でなされた  
でしょうか。それは、花粉の交配によって、二つの植物の性質  
を一つに組み合わせ、第三の新しい植物を作り出すことと、こ  
うして作り出したものの中から、いつでも、いちばんよいもの  
だけを残して、ほかのものは思いきってすててしまふというこ  
とです。

これは、別に新しい方法ではありませんが、バーバンク独特  
のやり方は、今までのように、ただ一本か二本のなえを材料と  
して実験するのではなく、同時に何百本、時には何万本という  
材料を使うことです。それから、場所も、温室のようなせまい  
ところや、はちなどばかりで実験するのではなく、すばらしく  
広い土地を十分に使うことです。

こうしたところで、集められたたくさんの野ギクのたねは、  
ていねいにまかれ、花粉の交配が行われ、それぞれの種類の特  
長がぬき出されて、だんだん一つのものにまとめられていくの  
でした。

やがて、だんだん計画に近い性質のキクが作り出されると、  
広い実験畑に、三メートル四方ぐらの区切りを無数に作って、  
その一つ一つに、注意深くたねをまきつけるのでした。

こういう大じかけな方法で育てた、数知れないなえの中から  
選びに選んで、最後に一本のすぐれたなえを残すのですから、



その根気と細かい注意とは、まったくたいへんなものだったでしょう。

バーバンクは、いつもものさしを持っていて、絶えず花べんやくきの長さとはば、

花の大きさなどをめんみつに測ったりしました。

こうして苦心に苦心を重ねたすえ、八年もかかって、やっと望みどおりのものを得ることができて、ここに、シヤスターデージーという、新しい植物と新しい名まえが生まれたのです。

シヤスターは、一年じゆう真白な雪をいただいているみねで、カリフォルニア州にあるバーバンクの農園から、はるか



にけだかくそびえて見える山の名です。

デージーは野ギクという意味です。

世界的なこの新しい花が、日本に關係が深いということはおどろくではありませんか。



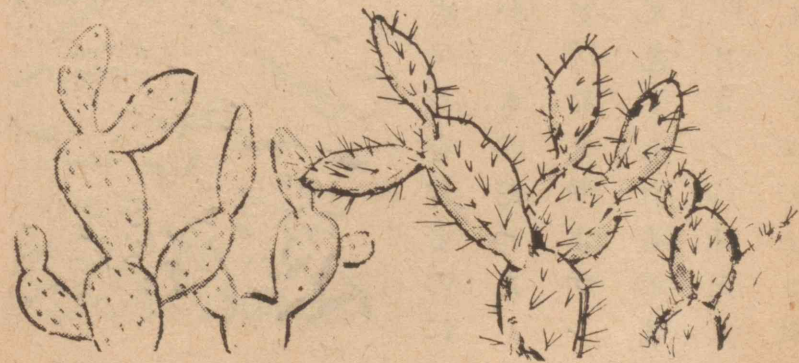
バーバンクは、このほかに、とげのないサボテンを作るのに

も成功しました。あのさばくやあれ地のやっかいものだった、

とげのあるサボテンも、バーバンクの力で、とげなしサボテンとそのすがたをかえて、人類の友たちとなってあらわれたのです。このサボテンの味は、モモのようだとか、メロンの味だとか、いや、パイナップルのようにうまいとか、イチゴのようだ

とか、人によっていろいろですが、だれにも共通なことは、今までにたべたことのないよ  
うなすばらしい味がするということ。そ  
の上、かちくのしりょうとしてもなくてはな  
らないものとなったのです。

なおこのほかに、トマトとポテトから「ポ  
マトー」という新しい植物を作ったり、よく  
できて質もよい「バーバンク・ポテト」や、  
よいかおりのするダリヤを作り出したり、木  
を改良したりして、その一生を、植物の改良  
と発見にささげ、人類の幸福のためにつくし  
たのです。



植物を限りなく愛し育てたバーバンクは、また、子どもが大  
すきで、子どもの友だちもたくさんありました。ある時、子ど  
ものための公園ができたお祝いに招かれて、次のような話をし  
ました。

「みなさん、わたしは、きらきらかがやく日光、青い空、山や  
海、木や草や野にいる鳥、それから、すがすがしい夜明け、  
きれいな夕やけなど、どれもこれもすきです。しかし、これ  
らのどれよりもかわいくすきなものは、みなさんのような子ど  
もです。

木や草や虫や鳥などは、どれも、わたしたちを正しい方へ  
導いてくれる先生です。わたしたちが、この木や草や虫や鳥

などをりっぱに育ててやれば、草や虫たちも、力の限りむく  
いを見せてくれます。しかし、子どもはそれ以上のものです。  
まったく、世界中に子どもほどよいものはありません。」

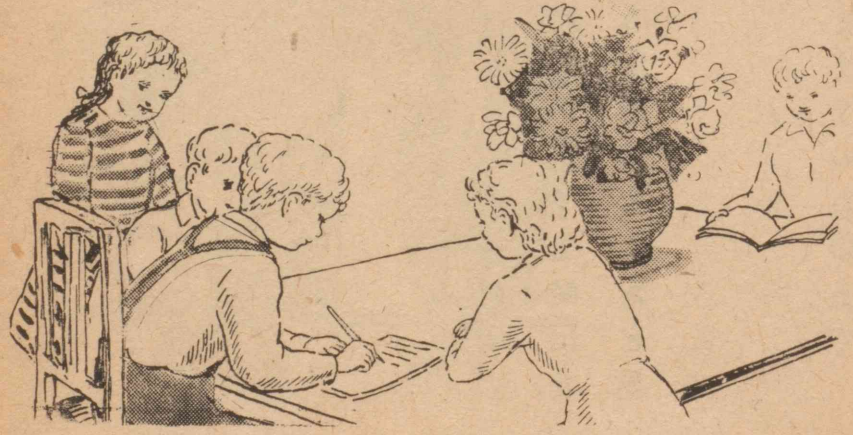
こうしたバーバンクには、いつも子どもたちから、美しい心  
をこめた手紙が送られました。

「バーバンクのおじさん、わたしたちは、おじさんが大好きで  
す。そして、おじさんが花などを作って、それをりっぱなも  
のにされるのが、ふしぎでたまりません。

わたしたちの小学校の近くに、花園があります。そこには  
バーバンクおじさんの作った花のたねだけ置いて、育ててあ  
ります。

わたしたちの先生は、ときどき遠足  
に連れて行ってくださいます。湖のむ  
こうの森へ行って、花や草のことを教  
えていただくのです。バーバンクおじ  
さんもいっしょに来てください。花や  
草のことを教えてくださったら、どん  
なにうれしいことでしょう。

おじさん、お元気でいらっしゃって  
ください。そうして、おじさんの花が、  
わたしたちにもおじさんにも、いつま  
でも美しいことをおいのりいたします。





三 自然の美

(一) 初雪

空がうつすらとくもって、寒い日でした。

宗平は学校から帰ると、おかあさんやおばあさんがつけものをつけているのを見て、ああ、もう、おつけものをする時になったのかなあ。それじゃ、ことしももう終りになったんだと思いました。

「おかあさん、おつけもので寒いでしょう。」

おかあさんは、手をまっかにして、大きなまないたの上で、

カブやダイコンを、ザクザクとこまかにきざんでいました。

「あれ、もう帰って来たの。さあ、おてつだいしておくれよ。」

みよ子もさつき帰って来たんで、おてつだいしてくれたよ。

おばあさんがものおきでつけておいてだから、宗ちゃんざるを運んでね。みよ子も運んでいるよ。」

「はい、いくらでも運ぶよ。おかあさん」

その時、土間のくぐりから、みよ子が大きなざるを持って、せどの方へ出て来ました。

「にいちちゃん、おつけもの運んでよ。」

「ああ、うんと運ぶよ。ぼくも。」

「冷たいのよ、手が。」



みよ子は、かた方の手を口にあてて、はあはあ息をかけてあたたためようとしました。

「そんなに冷たいの。」

「ええ、ダイコン、まだぬれているんですもの。」

せどの土は、朝のしも柱がまだとけきれないのか、かさかさとおおったようになっていました。

村の家々では、あちらでもこちらでも、つけものをつける季節になりました。

うらのたけやぶの方で、ミソサザイが、チャチャ、チャチャと鳴いています。ミソサザイは、しもがおりるようになるまで、どこからか来て、家のまわりを鳴いて遊びます。

宗平は、みよ子とふたりで、おかあさんのきざむダイコンやカブをざるに入れては、かたっぱしからどんどん土間の方へ運んでいきました。すると、おばあさんは、それを大きなおけの中に入れて、ばらばらつと塩をふりまき、また入れてはふりまいてつけていきました。

「おばあさん、ずいぶんたくさんつけるのね。」

「そりゃ、ことしのよくな物の不足の年には、つけものだけはどっさりつけておかなきゃ。」

つけもののおけは、大きなのが二つと、小さなのが二つ、もうあと少して、みんなつかってしまっそうです。

もう夕ぐれになって、冷たい風が吹き出した時、ちらちらと、空から白いものがふってきました。

「あれ、宗ちゃん、雪がふってきましたよ。」

と、おかあさんがいいました。

「ああ、ほんとだっ。雪がふってきた。雪だ。雪だ。」  
と、宗平は思わずさけびました。

鳥のはねのような白い雪は、ふわりふわりと空にまっ  
ているのです。

「雪こんこ、ふってきたっ。」

みよ子も、せどの庭をおどるようにと  
びまわりながらさけびました。

遊びからもどって来たさんきちも、大  
喜びです。

「まあまあ、そんなに雪がうれしいの。  
ほんとに、子どもって元気だね。」



と、おかあさんは言いながら、お葉をき  
ざんでいました。

「おかあさん、まだつけるの。」

みよ子がききました。

「さあ、きょうはもうこれくらいにして

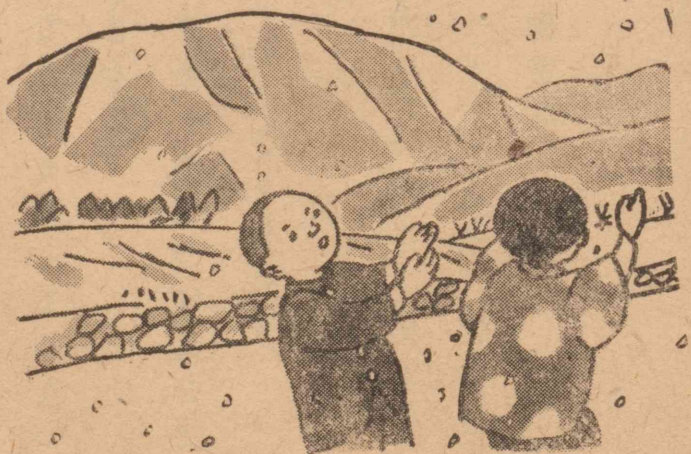
おいて、またあしたにしましょうか。

おばあさんにそう言うって下さいね。

もうおしまいにするって。」

そこで、みよ子は土間へいって、その  
ことをおばあさんに言いました。

「ほいな、もうおしまいにするかな。やれやれ、ごくろうさま  
だった。」



おばあさんは、暗い土間の中で言いました。

「おばあさん、手が冷たいでしょう。」

「なに、もう冷たいのをとおりこして、なんにも感じなくなつたんだよ。ほらな、こんなになつてしまつて。」

おばあさんは、ただれたようになった手を、みよ子に見せました。

「まあ、そんなになつて。」

「お塩をつかむので、よけいに冷たいんだよ。」

「おばあさん、雪がふつてきたのよ。」

「ほいな、雪がふりだしたかな。そりゃ初雪だ。」

「ほら、見てごらん。おばあさん。」

「どれどれ。」

おばあさんは、くぐり戸から外へ出て見ました。

「おばあさん、雪だよ。」

と、宗平が言いました。

「まあまあ、ほんに雪がふつていること。ことしは早い雪だなあ。初雪が早くくる年は、おそくまであたたかいもんだと言っているから、まあ、ありがたいことじゃ。」

そう言いながら、おばあさんは、空から落ちてくる雪を、めずらしそうにじつとながめていました。

「おばあさん、初雪が早くふる年はあたたかなの。」

宗平がふしぎそうな顔をしてきました。

「そういうもんじゃそうな。」

宗平はふしぎな気がしました。初雪が早ければ、それだけ寒

さが早くきそうな気がするのにと思いました。

「おばあさんはえんがわのところへ行って、おかあさんに、  
「やれやれ、冷たいことだろうに。」  
と言いました。」

「ほんとに冷たいこと。おばあさんこそ冷たいことでしたてし  
よう。」

それから、えんがわはかたづけられました。  
雪はちらちらまっています。たけの葉にもうつすらと白くか  
かって美しく見えました。葉の落ちた大木のえだにもふりかか  
っています。かれた草の葉も、庭の石も白くなりました。うら  
の山の方も、夕ぐれの暗い空の中に、ほんのりと見えます。  
「おかあさん、こんやは雪がうんとつもるの。」

と、宗平はたずねました。

「さあ、でも、初雪つてもものは、そんなにつもるもんじやない  
のよ。ちらちらとふるくらいのものよ。」

おかあさんは、井戸ばたで手をあらいながら言いました。

宗平は、子ウマにかいばを持って行って  
やりました。子ウマも寒そうにしています  
た。

「ほら、ほら。」

かいばとわらとを、うまやの中へ入れて  
やると、子ウマはボリボリと音をさせてた  
べました。子ウマも、こんやはきつと寒い  
ことだろうと宗平は思いながら、子ウマの



首のところを手でなでてやりました。

子ウマは、宗平の顔をじっと見つめていました。

(さかい・あさひこ による)

(二) アルプスの山のむすめ

ことし六つになるハイジは、まだ見たこともないおじいさんの所に世話にならねばならなくなつて、おばさんに連れられていくことになりました。

そのおじいさんというのは、ふもとの村をきらつて、もう何年も前から、このアルプスの山の中にたったひとりて住み、村の人からは「アルムのおじいさん」とよばれていたのです。

山のとちゅうで、ハイジたちは、ヤギのむれを追いながら登つてくるペーテル少年といっしょになりました。ペーテルは、山の中ほどにたった一けんあるヤギをかう家の子どもで、毎朝デルフリ村までおりて、家々のヤギを山へ追い上げ、夕方までおいしい草をたべさせては、また連れて帰るのが仕事でした。ハイジは、ペーテルとすぐなかのよい友だちになりました。おじいさんのうちにも、白とどび色のきれいなヤギが二ひきいて、これも、ペーテルがほかのヤギたちといっしょに、いつも追い上げてくれるのです。ハイジはそれを見るたびに、一度山へいってみたくてたまりませんでした。

あるよく晴れた朝、おじいさんから、

「ハイジ、おまえもヤギといっしょに山へ遊びにいくかい。」

と言われて、うれしくてはねまわりました。

やがてハイジは、ペーテルといっしょに喜び勇んで山へ出かけました。空はきれいにすんでいるし、ひろびろと続く山のしやめんには、いろいろな花が数限りもなくさいっていました。

夕方が近づくと、太陽は山々のうしろへしずみかけました。

牧場の草から、花から、遠い岩のはしまで、急に金色の光に包まれたのを見て、ハイジはさけびました。

「ペーテル。ペーテル。火事になったんじゃない。みんな燃えてるわ。岩もまっかよ。」

雪の原に火がうつってるわ。モミの木も燃えててよ。山じゅう火事よ。」

「大じょうぶだよ。夕方は、いっただってこうさ。ほんとの火事じゃないよ。」

ペーテルは、おちつきはらって言いました。「じゃ、なんなの。ペーテル。」

「なんだか、ひとりてにああなるんだよ。」

「そう。——あら、こんどはバラ色になったわ。まあ、きれい。あの雪の山を見なさいよ。」

——あれ、なんて山なの。」

「山の名なんか知らないよ。」

「あら、あら、雪がまっかになったわ。上の



岩山のところには、バラがどっさりあるわ。——まあ、だんだんはい色になったわ。あらあら、みんななくなってしまいわ。ペーテル。】

ハイジの心配そうな顔を見て、ペーテルは、あしたもまた夕方になれば山は赤く燃えるのだと話してきかせました。

「さあ、お立ちよ。帰るんだ。」

ペーテルはするどい口ぶえで、ヤギたちをよび集めました。

「じゃ、ここへ来れば、毎日でも見られるのね。」

「見られるとも。」

ハイジは、ペーテルといっしょにヤギについておりながら、あしたから毎日登ってこようと思いました。

アルムおじさんは、いつものように、小屋の外のこしかけにかけて、みんなを待っていました。

「おじいさん、ただいまあ。」

ハイジは、おじいさんにとびつきました。

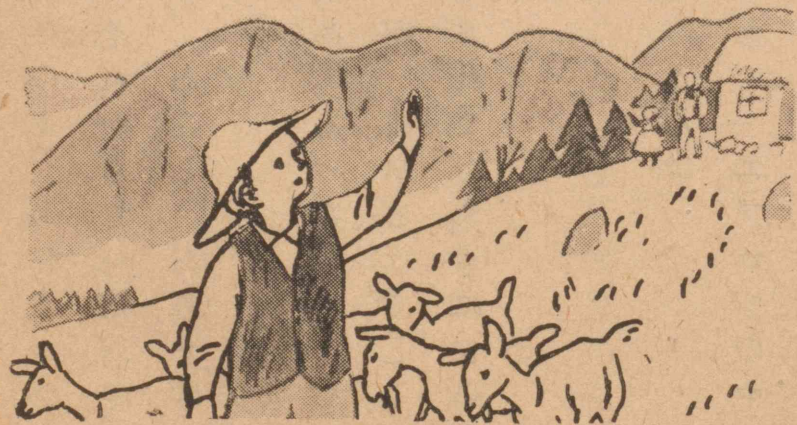
二ひきのヤギもかけていきました。

「おお、お帰り、お帰り。」

おじいさんは、かた手でハイジの手をにぎり、かた手でヤギたちに塩をやりました。

「じゃ、さようなら。あしたもいっしょにおいでよ。」

ペーテルはそう言って、ヤギたちを連れてふもとの村の方へおりていきました。





「おじいさん、きょうはとてもきれいだったのよ。山がまっかになつたり、バラ色になつたりしたの。それから青い花だの、黄色い花だのがいちめんさいていたわ。わたし、おみやげに持って来たわ。」

ハイジはそう言つて、エプロンにつみためてあつた花を、おじいさんの足もとにふるい落としました。が、まあどうでしょう。あんなにきれいだった花がすっかりしおれて、色もおいもなくなつていゝるではありませんか。

「まあ」。

ハイジがあきれてながめていると、おじいさんは、

「花はね、お日様の中にさいているのがすきて、エプロンの中へとじこめられるのはいやなんだよ。」

と言いました。

「そう、じゃ、わたし、もう花をつんだりしないわ。」

ハイジはそう約束くしたついでに聞いてみました。

「ね、おじいさん。山の鳥は、どうしてあんなにガアガア鳴きながらのぼつていくの。」

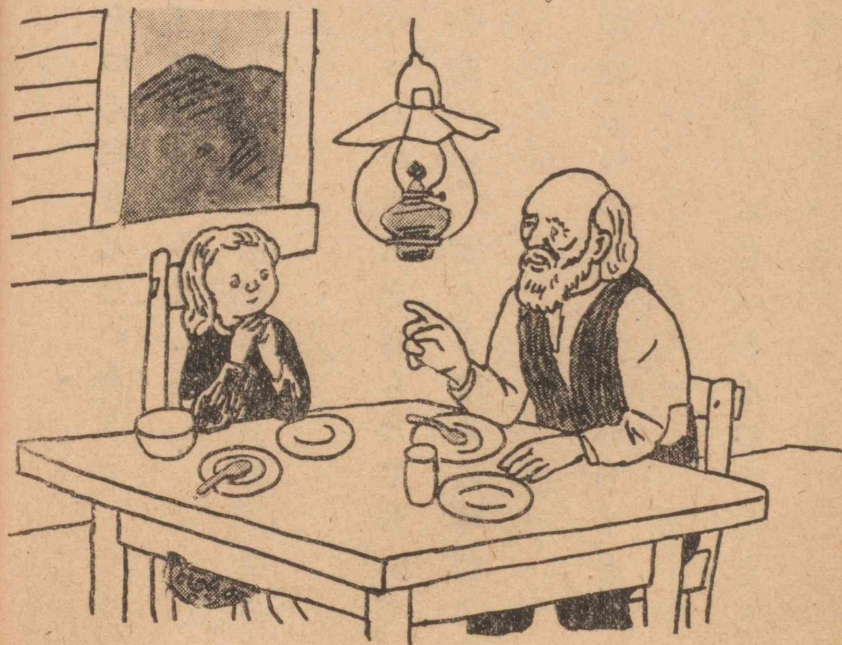
「こんどは鳥の話かい。まあ、いつてからだをあらつておいで。わしはヤギのちちをしぼつてくるから。ばんごはんの時にみんな話してあげるよ。」

ハイジは言われた通り、けさのたらいのところへいつて身じまいをしました。

やがて、ミルクのおわんを前にして、おじいさんのこしらえてくれた高いこしかけにかけた時、おじいさんは、鳥のことを

話してくれました、

「鳥はね。にんげんをさそって  
いるのだよ。よけいなおしゃ  
べりをしたり、悪口を言ひあ  
ったりするのはおよしなさい。  
自由な道を歩きたい人は、わ  
たしたちみたいに高いところ  
に住みなさい。にんげんの中  
よりもずっとゆかいです。と、  
鳥は言っているのだよ。」  
「じゃ、あの牧場だの岩山だの  
が、急に火事みたいになるの



は。

「それは、お日様が、山々に『さようなら』をするのだ。そう  
して、あしたまた来てあげるといふ約束をするために、お日様  
のいちばん美しい光を投げかけているんだよ。」

この説明は、すっかりハイジを満足させました。

ペーテルにきいてもわからないことでも、おじいさんにきけ  
ば、なんでもわかるのだと思いました。

そのばん、ハイジは、かれ草のベッドでぐっすりねむりなが  
ら、赤いバラのようにかがやいた山や、ヤギたちのゆめを見ま  
した。

#### 四 わたしたちの劇

劇のすじがきをわたしたちで作ってみましょう。

作文を書くのと同じ気持ちでよいのです。

1. 自分たちのよく知っていることを
2. ありのままに自然に書けばいいのです。

といつても、会話のなかに、その人の考え方や、感じ方が全部あらわれていなければなりませんからなかなかむずかしいですよ。

まず、何を書いたらよいか、しつかりきめなければなりません。それがきまつたら、出て来る人の数、名まえ、性質、年齢をきめることです。

一幕にするか、二幕にするか。一幕でもいくつの場にするか相談してきめます。ここまできまつたら、だれかひとりが書き始めてごらんなさい。それをもとにして、ここはよい、ここは悪い、こんなふうになおそう、というぐあい話します。ひとりだけでなく、同じ題で何人か書いてみます。それを読み合つて、よいところを寄せ集めて、だれかひとりがまとめて書きなおしてみるので、これがうまくできるよになつたら、ひとり書いてごらんなさい。

#### (一) とし子の劇

場所 山道

時 秋の午前

人物 とし子

やす子

まさお

三人がリュックをせおって出て来る。

とし子 ずいぶん高い山ね。

やす子 こんなに太い木があるわ。

まさお ぼく、先にいくよ。

まさお左の方にはいる。

とし子 ああ、くたびれた。

やす子 こんなにあせが出たわ。

とし子 少し休んでいきましよう。

大きな石にこしをおろす。

やす子 あんなに小さく汽車が見えるわ。

とし子 おもちやのようね。鉄橋をわた

るとこね。



いまは山中、いまは浜の音楽がピアノできこえてくる。

よし子 まさおさん、もうずいぶん登ったのかしら。

やす子 いっしょによんでみない？

ふたり ま・さ・お・さーん

さーん

やす子 おかしいわ、だれでしよう。

よし子 やまびこよ。

やす子 道をまちがえないといいけど。

とし子 急いで登ってみましようよ。

やす子 さびしくなったわ。

急いで、左手にはいる。鳥の声がきこえる。(山ばと)

右手から、まさおが出て来る。

まさお めずらしい石がいっぱいあるな。

おうい、やす子さん——とし子さん——

やまびこ ……さん ……さん

まさお 道が二つになっているところがあったが、あそこでわか  
れわかれになつてしまったかな。急いでもどつてみよう。

急いで、もどろうとすると、「まさおさん」と、いう声がきこえてくる。

まさお おうい、こつちだよ。——

ふたりは急いで登って来る。

やす子 ああ、よかつた。

とし子 よかつたわ。

まさお 迷い子になつたかと思つた。

この辺でおべんとうをたべようよ。

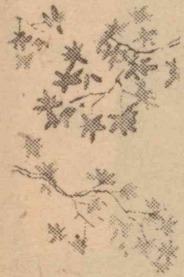
とし子 まだ早いわ。

まさお でもおなかがすいたよ。

やす子 じゃ、ここはいいながめだから、ここでいたたきましようよ。  
うよ。

三人おべんとうをひろげる。

これはとし子さんが作った劇ですが、みなさんもおたがいに  
話しあつて作つてみましょう。





所 森の中

出るもの イソップおじさん

カラス

カメ

ネズミ

カモシカ

その一

ベルが鳴ると、幕の前にイソップおじさんが出て来る。古めかしい洋服を着て、白いひげをはやしている。

イソップ (うたう)

もしもしかめよかめさんよ。

世界のうちでおまえほど、

あゆみののろいものはない。

どうしてそんなにのろいのか。

さてみなさん。この歌は何の歌か知っていますか。そう、

知っていますね。「うさぎとかめ」ですね。それじゃ、そ

の「うさぎとかめ」のお話知っている人。みんな知って

いますね。よろしい。ではこのお話を作ったのはだれで

しょう。

はい。イソップです。

イソップ イソップですって。おやおや、よく知っていますね。じ

つは、このわたしがイソップのおじさんなんです。わた

しはむかしむかしおもしろいお話をたくさん作りました。

あんまりたくさん作ったので、じぶんでもわすれてしまったのがあります。きょうはひとつ、みなさんといっしょに、そのわすれてしまったお話を一つだけ思い出してみましよう。

さあ、幕のかけでは、もうわすれたお話のお芝居が始まつているようです。さっそく幕をあけてみましよう。

(と、言いながら幕をじぶんで開く。)

ぶたいは、森の中のカラスとカモシカとカメとネズミがなかよくいっしょにくらしている家中。部屋の真中にテーブル。そのまわりにいすが四つ。かみてにごちそうを作る台所。今、食事の用意をしているところ。ネズミのおばさんが白いエプロンをかけてごちそうを作っている。明かるい楽しいような音楽が流れている。

ネズミ

さあ、これがカラスさんのすきな、ドジョウのフライ、

(カラス受取ってテーブルの上にならべる。)これがわたしのすきな、ニンジンのはいったサラダ、(カメが運ぼうとする。)あら、カメキチさんのはてつだわなくてもいいのよ。

カラス

(おさらを受取って)カメキチくん。きみは世中におうちをしようつて、動くのに不自由なんだから、てつだわなくともいいんだよ。

カメ

でもねえ。ぼくだけ何もしないんじゃ、すまないんだよ。

カラス

そんな心配なんかいらないよ。ごちそうを運ぶくらいなんでもないんだ。さあ、休んでいてくれたまえ。

ネズミ

そうよ。そんなえんりよはいらないのよ。それぞれ、得意の仕事があるんですもの。どっしりすわって動かずにする仕事なら、カメキチさんにしてもらおうし、こんな仕

事はわたしたちの方がいいのよ。急ぎの用はカラスさんか、カモシカのおばさんにしてもらうのが、いちばんだし。

カラス　ごちそうをさがして、引いて来るのは、ネズミのおばさんになわなないし。

ネズミ　だからカメキチさん。何も気にせず、だまってせきについていればいいのよ。

カメ　ほんとに、いつもぼくはのろまで、みんなのせわにばかりなるね。(いすにこしをおろす。)

ネズミ　なんのなんの、さあ、これがカメキチさんの大すきなブドー酒よ。(カラスが受取って運ぶ。)

カラス　ほい、うまそうなブドー酒だな。

ネズミ　おつぎはやわらかい木の芽の塩づけ。カモシカさんのだ  
いこう物。

カラス　(さらを受取って)ほい、カモシカおばさんのだ  
いこう物。

カメ　そういえば、カモシカのおばさんまだ帰らない。どう  
したんだろう。

ネズミ　さあ、おしまい。(と台所をはなれて、エプロンで手をふきながら)  
ほんとにおそいわねえ。お昼にはきつと帰ると言っ  
たのに。

カラス　このごろは、この森にもりようしがはいりこんでいる  
から、まったくゆだんができないよ。

ネズミ　ほんとにそうね。カラスさんは空を飛べるし、わたした  
ちはすばしっこいからいいけれど、カメキチさんは気を



つけてくださいね。

カメ ありがたい。でも、カモシカおばさんは足が早いけど、あわて者だから心配だなあ。

ネズミ そうよ。このごろ、イヌがりようしのおさきぼうをかついで得意になっているから。

カメ 心配だなあ。

カラス 心配だねえ。

ネズミ (耳に手をあてて) あ、何でしょう。

みんなも耳をすます。何も聞こえない。

ネズミ なんだか、おばさんの声が聞こえたような気がしたけど、気のせいかしら。

カラス ヤギのおじさんのところへいったんだから、いくらゆっ

くりしていても、もう帰らなくちゃならないはずだ。

カメ ぼくが、カラスさんのように空を飛ぶはねがあるなら、すぐにも飛んで行って、ようすを見て来るんだがなあ。

カラス そうか、なるほど。わすれていたよ。ごめんね。すぐ飛んでいって、空からようすを見て来よう。(ぼうしをかぶって出ていくしたくをする。)

ネズミ おなかがすいているでしょうけど、それじゃ、カラスさんんたのむわね。

カメ のろまのくせに、こんなことたのむなんて、カラスさんごめんね。

カラス いやいや、ぼくはまぬけだから、きみに言われなけりやわすれているんだ。さあ、こうしちやいられない。おば

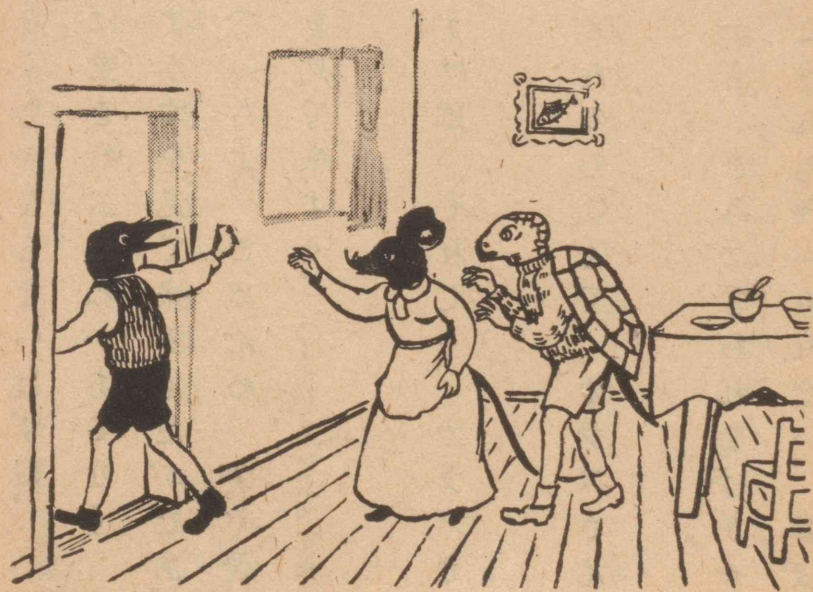
さんにあぶないことでも  
あつたら、たいへんだ。  
では、気をつけて見て来  
てね。

カラス、しもての方に飛んで行く。ネズミ  
とカメはそれを見送る。まどから手をふ  
る。

カメ カラスくん、たのんだよ。

ネズミ あら、もう見えなくなっ  
た。やっぱりカラスさん  
は早いわねえ。

カメ (つばさのように手をふって)



すうつと空を飛べるんだもの、いいねえ。ぼくもカラス  
くんみたいにつばさがあつたらなあ。

ネズミ カメキチさんのこうらだつて役にたつ時があるわ。

カメ でも、ぼくはこうらがあるためにいつもものろしてい  
て、みんなのせわにばかりなつていゝるんだ。カモシカお  
ばさん、どうしているかなあ。心配だなあ。

ネズミ ほんとにどうしているんでしようね。このごろ、りよう  
しがわなをかけているつて、ほんとうかしら。

カメ こないだ、オオカミがかかったわなつて、きつとそれな  
んだ。心配だなあ。やさしいカモシカのおばさんがわな  
になんかかかったらどうしよう。

ネズミ (まどにかけ寄つて) あつ、カラスさんが帰つて来た。

カメ (同じくまどに寄ってさげぶ) カラスさあ——ん。

ネズミしもてにかけこむ。カメは急ごうとするが、のろのろしてまにあわない。  
ネズミとカラスが「たいへん、たいへん」と言いながらあわてて出て来る。

ネズミ ほんとにどうしましょう。

カメ ど、どうしたの。

カラス (息をはずませて) わ、わなにはまって、苦しんでいるんだ。

カメ カモシカのおばさんが、わなに——。

カラス そうだ。ぐずぐずして、りょうしが来たたら、たいへんだ。

カメ それじゃ、さつそく助けにいかなくちやあ。

ネズミ どんなじょうぶなわなだって、わたしがガリガリかじつてしまえばだいじょうぶ。

カラス ぼくは空から見はりをしてる。

ネズミ さあ、いきましよう。

カラス いこう、いこう。

ネズミ (カメを見て) カメキチさんはたいへんだから、おうちで留守番してるのよ。

カメ えっ、留守番だって。

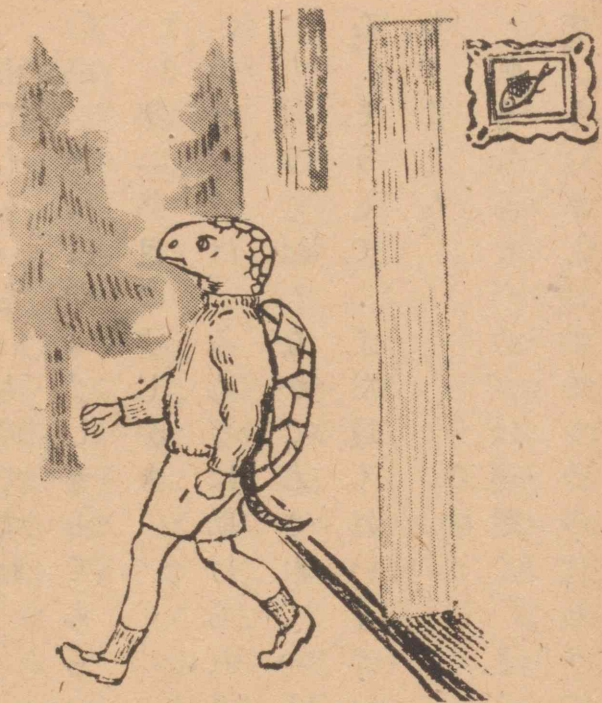
カラス ではカメキチくん、たのんだよ。きっとカモシカのおばさんを助けて来るから。

ネズミ カメキチさん、安心して待っていらっしやい。

カラスとネズミがすばやくしもてにかけていく。カメキチは取り残されて、まどから手をふっている。しばらくまどから外を見ているが、テーブルの所にもどり、ナプキンを開いてごちそうの上にかける。まどにいて外を見る。またテーブルにもどる。



カメ やさしい、なかよしの  
カモシカおばさんがわ  
なにかかって苦しんで  
いるのに、いくらのも  
まだって、ぼくだけこ  
うしてぼんやりしては  
いられない。そうだ、  
ぼくだって何かの役に  
たつかもしれない。さ  
つそく出かけよう。  
カメはからだをふりながら、大急ぎで  
しもてにはいる。



かみてからイソップが「ああ。カメキ  
チくん。カメキチくん。」とよびなが  
ら出て来る。急いでいるカメキチは、  
そんなことに気がつかない。どんだん  
いってしまふ。

— 幕がしまる —

幕がしまりました。

これからどんなことにな  
るのでしょうか。第二幕目  
は、みなさんで幕をあける用意をしてみませんか。そのため  
は、こんなことに気をつけましょう。  
○イソップ物語のこのお話をよく読んで、すじをつかんでくだ

さい。

○イソツプおじさんをどんなふうに使いますか。第二幕目の初めにはどんなことをしてもらいましょか。また、最後にも出てもらいたいものですね。

○第二幕にはりょうしも出てもらいましょ。

第二幕目のすじがき

カモシカは、みんなに助けられました。

りょうしはわながこわされているのを見て、くやしがりまして。そうして、まだ遠くはいくまいと思ひ、その辺をさがしまわりました。

何も知らないカメは運悪く、そこへのこのこと出て来たので。りょうしはカモシカの代わりにカメをつかまえ、持って来

たふくろに入れてしまいました。さて、帰ろうとすると、とつぜんカモシカがびっこをひきながら現われました。りょうしは大喜びで、ふくろをその場におき、カモシカのあとを追いかけてきました。すると、カモシカはびっここのまねをやめてにげ出しました。その間に、ネズミが出て来て、ふくろをくい破りカメを助け出しました。カメはみんなにめいわくをかけたことをあまりりましたが、みんなにはカメの気持がよくわかっていますのでカメをいたわってやります。

そこへりょうしをうまくはぐらかしたカモシカも帰って来ました。みんなはかわるがわるだきあつて無事を喜びました。

○この劇は第二幕で終るように考えてください。

用意ができたなら、第一幕に続いて実演してみましょ。

五 学校ものがたり

(一) うつりかわる



「おとうさん、どうしてこんなにおそかったの。」

「うん、PTAの会が終わったあとで、久しぶりに校長先生とむかしの話を始めたので、時間のたつのも気がつかなかったよ。おとうさんたちが教わった時から、もう三十年近くもたつが、先生は相変わらずお元気だね。すっかりしらがにはなられたが、あ

のころの熱心さはすこしも変わらない。ほんとにいい先生だ。」

「むかしの話ってどんな話。」

「ちようどとしおぐらいのころの話だよ、わすれられないのは、今の校舎ができた時のことだ。なんととっても、おとうさんは、今の校舎での第一回の卒業生だからね。あっはっは。」

「やあ、またおとうさんの口ぐせが始まった。」

「それまでは早川のそばにあったんだが、今はすっかり畑になつてしまった。でも、運動場のすみにあったたけやぶはまだ残っているね。よくたけのこが出たものだった。」

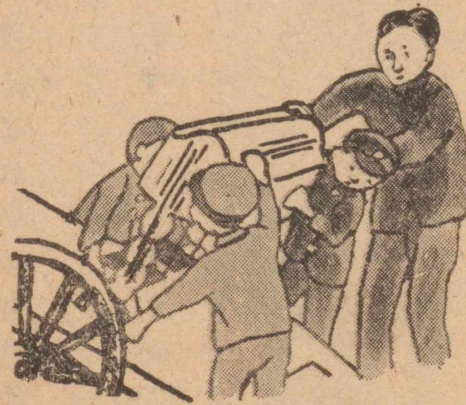
小さい校舎だったが、日がよくあたって冬でもあたたかかった。しかし、もうすっかり古くなったし、生徒はいりきれなくなるし、それにあまり村のはしの方だったので、村の

人たちが相談して今の所に移ったんだよ。

移る時は、おとうさんたちもてつだったものだ。たった一つしかない小さなオルガンを、先生といっしょに、だいにだいに教室から運び出して荷車に積んだ時、先生が今の校長先生だがね、大きな声で、『氣をつけて、氣をつけて。きずをつけないように。』と言われたのが、ふしぎにわすれられない。

「じゃ、今ある大きなオルガンはまだ、なかったんですね。」

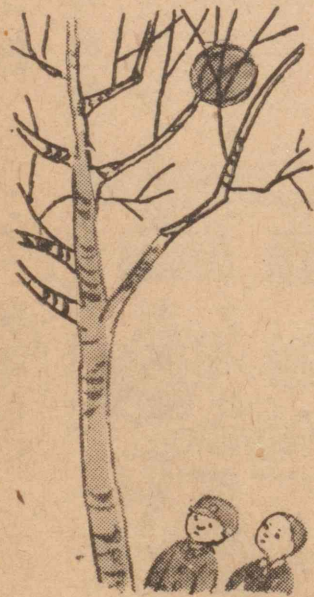
「そうだとも。新しい校舎で大きなオルガンを見た時は、室物のように見えたものだ。」



二階のまどからは町の方まで見えるし、広い運動場は、いくらかけまわっても広すぎるような気がするし、ほんとにうれしかったね。そうそう、おとうさんたちが運動場のまわりに木を植えたのは、それからまもなくのことだった。あの木も大きくなったね。」

「おとうさん、もう屋根より高いんですよ。このあいだね、キックボールの時ボールが高いえだにひっかかってこまったよ。」

「ははは、ほんとに大きくなったものさ、きょうも木を植えた話が出たら、校長先生が、『木も大きくなったが、あのころの卒業生も、もうみんな村



のりっぱな人たちになりましたね。』としみじみ話されたよ。『おとうさん、きょうぼくたちの教室を見た。』  
『まだ時間が早かったのではいってみた。学級新聞はおもしろかった。りっぱな研究や調べたものも、たくさんはってあったね。』

それから、ついでに校舎をひとまわりしたよ。つぎつぎ建てましたので大きくなったね。中もずいぶん変わった。雨天体操場、図画工作室、標本室、衛生室もあるし、それから学校放送やえい画や給食の設備まですっかりそろっている。中でも、きょうど室は感心した。よくあんなに集めたり調べたりしたね。』

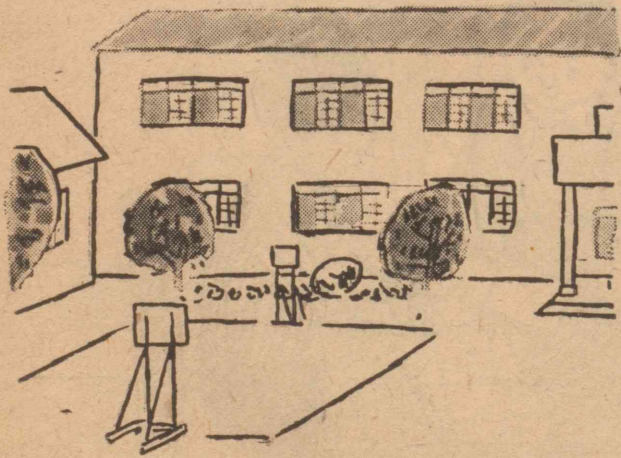
『あの中に、ぼくたちの調べたのものもあるんですよ。』

『おとうさんも、これから、ときどきあそこへ行って勉強しようかな。』まあ、としおたちはほんとにしあわせだ。それいきよりは、PTAの話しあいで、こんどりっぱな図書館を作ろうということにきまったんだよ。

おとなも勉強できるよにな。』

『うわあ、うれしいな。それで、このあいだ校長先生が『今にきみたちがうんと喜ぶようなことがあるかもしれないよ。』と、おっしゃったんだな。』

『そうかもしれない。としおたちがおとうさんぐらいになったら、また学校がどんなに変わるのだらうね。』





(二) 学ぶ心

図書室

しずかに読む。

しずかに書く。

そして考える。

「もつと調べようよ。」

「うん。」



しずかに読む。

しずかに書く。

また考える。

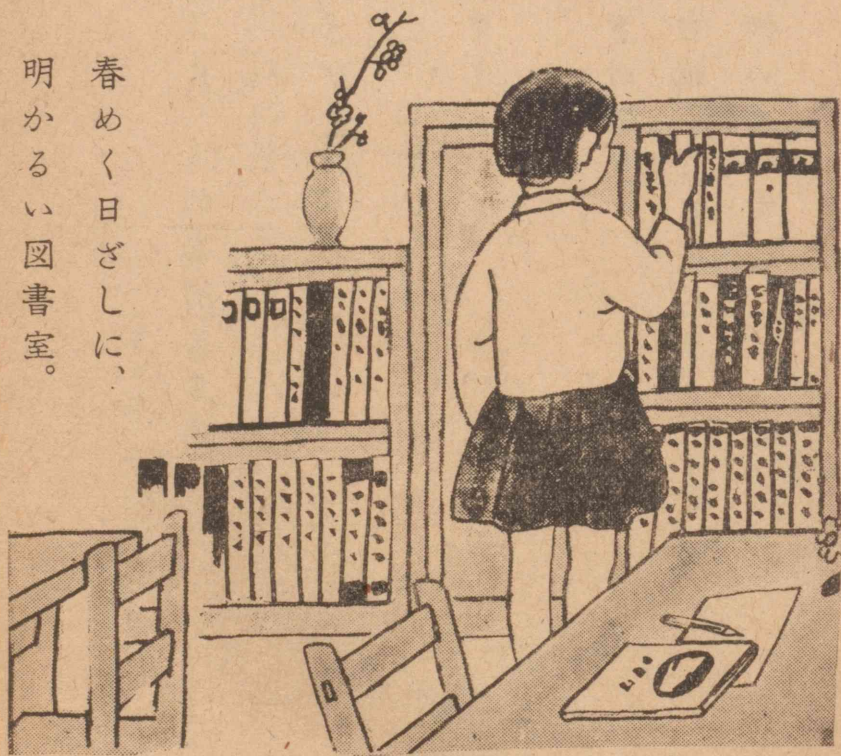
「ああ、そうか。」

「わかりそうだね。」

しずかに読む。

しずかに書く。

なお考える。



春めく日ざしに、  
明かるい図書室。

学校へいく道

冬になって氷がはると、  
冬になって雪がふると、  
学校へいく道は、長くさびしい。

だが、ゆかいな夏がきて、

鳥が鳴き

木の実はみのり、花がさけば、

学校へいく道は、なんと短いことだろう。  
そうだ。楽しい時間は短いものだ。

しかし、勉強がすきで、

ちえを得ようとほげむ子には、

学校へいく道は、いつても短い。

照る日も雪の日も雨の日も、

どういう人であろうと、心はけだかく、

どんなことをするにも、心をこめて、

どういう時でも、話すには心やさしく、

どんなところに住もうとも、人の喜びとなれ。

(ジョン・ラスキン)

(三) 話す喜び

ジョルジオのむすめジジアは、気の毒にも、耳もきこえないし口もきけない。ジョルジオはそれを悲しんで、町のろうあ学校へ入学させた。

ジョルジオは、きょう久しぶりに学校をたずねた。

「わたしはジジアの父です。」

「あ、そうですか。すぐおよびしましょう。」

ジョルジオは、待っている間じっとしていられなかった。

間もなく、ドアがあいた。黒い服を着た女の先生が、きれいな少女の手を引いてはいつて来た。

「あ、ジジア。」

ふたりはひしとだきあった。ジジアのほおにはなみだが流れ、ジョルジオのかたは波のようにゆれた。

やがて先生がにこにこしながら、はつきりした声で、ジジアに、

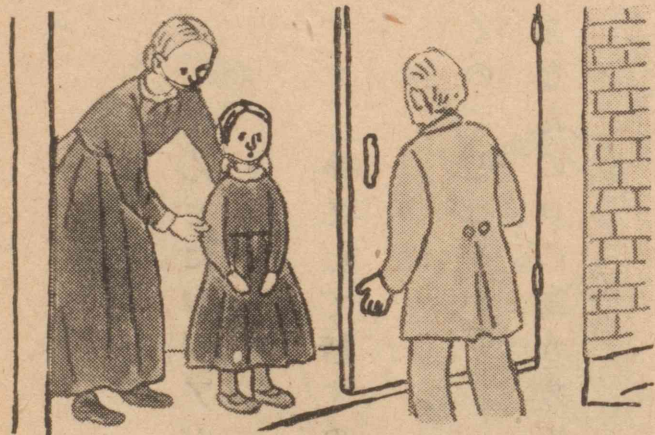
「この方はどなたですか。」

と話しかけた。すると、ジジアもにっこりして、

「わたしのおとうさんです。」

と答えた。それは、ゆるゆるした調子のことばだったが、発音ははっきりしていた。

「おっ。」



「ジョルジオが一足きがつて青くなった。口を、口をきいた。ジジアが口をきいた。」  
信じられないというようすだった。

「先生、今のはほんとにジジアの声ですか。ほんとにジジアが話をしたんですか。」

「そうですよ。りっぱに発音ができるのです。手まねで話すのではありません。」

「それでは、わたしの言うこともきこえるのでしょうか。」  
「いいえ、それはきこえません。でも、あなたの口の動き方で、あなたが何と言ったかわかるのです。」

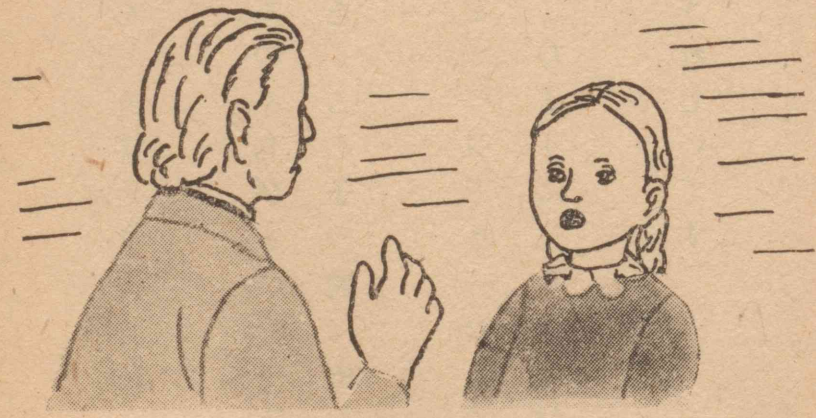
この学校では、苦心して、一語一語、くちびるをどういうふうにして、舌をどういうふうに動かせばいいのか、むねと

のどにどう力を入れるのかなどと教えるのです。

だから、他人の口もとを見て、そのことばを知るのですね。もちろん、その声も、じぶんの口から出る声もきこえないのですが、それでりっぱに役にしたつのです。」

ジョルジオは、たまげたように目をまわくした。そして、ためしてみようというようすで、

「ジジア、おとうさんが来て、うれしいかい。」



と話しかけた。

ジジアは父の顔を見つめていたが、なんとも答えなかった。

「おや、だめだ。」

「いいえ、だめではありませんよ。あなたのくちびるの動きを見ていなかったからです。あなたの顔を、この子の前に出して、はっきり言ってごらんさい。」

ジョルジオがそのとおりにした。すると、ジジアは一心に父のくちびるを見つめ、口の中までのぞきこむようにしていたが、やがてはつきりと、

「はい、おとうさんがおいでになって、うれしいです。」

と言った。

「あつ、返事をしたっ。」

ジョルジオはいきなりむすめにだきついた。そして、もつと聞こうとして、つぎつぎに話しかけた。

「おかあさんの名は。」

「アントニオ。」

「妹の名は。」

「アデレイド。」

「この学校の名は。」

「ろうあ学校。」

「十の二倍は。」

「二十です。」

ジョルジオはぼろぼろなみだを流した。

「先生、先生、ありがとうございました。お礼の申しあげよう。」

もありません。——ああ、ジジアが口をきける。かんじようもできる。こんなうれしいことはない。」  
「いいえ、それだけではありませんよ。字を書くことも、歴史や地理も習っています。卒業するころには、ひととおりの勉強のほかにも、手芸やさいほうもみっちりしこまれますから、世の中へ出ても、りっぱに働けますよ。」

「この卒業生で、りっぱに働いているものがたくさんいます。」

「そうですか。ほんとうにありがとうございます。」

「いいえ、お礼など。わたしたちは、子どもたちが口がきけるようになつて喜ぶ顔を見ると、ただうれしくてたまらないのです。——さあ、ジジアさん、おとうさんとゆつくりお話しな

さいね。」

ジジアがうれしそうに父の顔を見上げた。ジョルジオはその手を取つて、しきりに話しかける。答えるジジアの口もとを見ながら、わらつたり、ひざをうつたり、じつと耳をかたむけたり、まるで、天からきこえてくる美しい音楽でも聞いているようなようすだった。

「きょう一日、むすめさんをお連れになつてもようございます。」

「えっ、ほんとですか。——ああ、ありがたい。では、すぐ家へ連れていって母に見せてやります。近所の人にも話をさせてやります。ああ、みんなどんなにびっくりするだろうなあ。」  
ジョルジオは、うれしさにむちゆうになりながら、ジジアにマントを着せてやつた。



(一) 北極へ

ナンセンを隊長とする北極探險隊は一八九三年七月二十一日の朝早くノールウェーを出ばんしました。一同を乗せた船はナンセンが科学的研究のかぎりをつくして作ったフラム号であります。フラムということばは、ノールウェー語で「前進」の意味であります。

二か月後には、もうすっかり氷にとざされて、ただ潮の流れのなすがままにただよっているほかはないようなところまで進んでおりました。こうしたたいくつな漂流生活が始まると、船の中は工場に一変しました。ほの手入れをはじめ、くつも衣類

も、スキー、そり、精密な機械器具まで作ることができました。また水温、水深、潮流の強さ、方向、氷の厚さ、海中の生物などの研究にいそがしい日を送りました。

探險隊の十三名はまるで一家族のように、楽しく明かるく毎日を送ることができました。ナンセンはじぶんと隊員との間に何もわけへだてをしませんでした。みんな同じように仕事をし、同じ食物を同じテーブルでたべ、同じ居間で生活しておりました。どんな小さい計画でも十三名全員の自由な討議がなされ、また全員の投票によって決められるような組織になっておりました。

あくる年の一月、フラム号の最初の災難がやってきました。それは、氷の山にぶつかった時であります。氷の上にどんだん



氷のこぶができ、氷の山ができます。デッキはこの氷の下にうずまっしてしまいました。船はギーギーと音をたててかたむいていきました。氷の上に出る用意をしなければなりません。テント・ボート・イヌ・そり・衣類・いっさいのものが安全な所へ運び出されました。やがてしずみそうに見えました。その時、隊員のひとりがいよいよの気がつきました。ナンセンは、はげしくゆれる船にかけこんで、その隊員の名をよびました。そうすると、ふる場の方から、たしかに答がありました。

「船がしずみかけているぞ。おれたちはきみが出て来るのを待つているんだぞ。早く、早く――」。

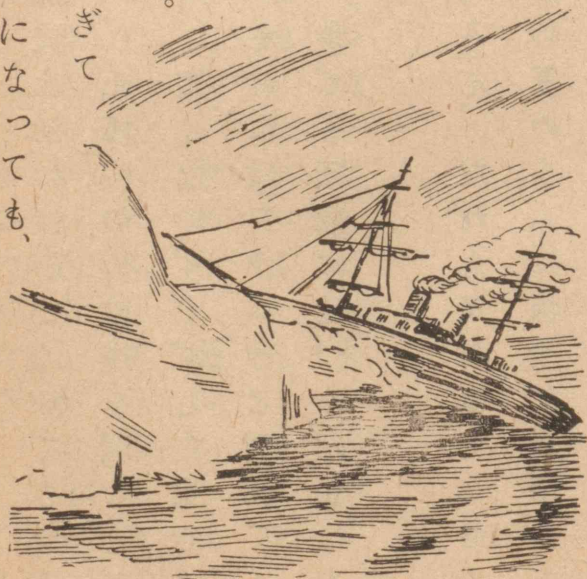
「ようし、いまいくよ」。

と、のんびりした声がきこえます。

「当分、こんな気持のよいふるにははいれまいと思つてね。ゆつくりふるにつかっていたんだよ」。

と、言いながら、着物を着ながらのそのそ出て来ました。あたりまえの船だったらしずんでしまつたかも知れません。だが、フレーム号は少し氷に持ち上げられただけでたちなおりました。それからは氷におさえつけられてギーギーきしつても、だれもあわてて出ようとはしませんでした。

氷上の第一年は思わしくなく過ぎてしまいました。一八九四年の九月になつても、



ほとんど船は北に進んでいるようすもありませんでした。ナンセンはこんな行きつもどりつの漂流生活にはがまんができなくなってしまうました。何とかして、北極への他の道を開こうと決心しました。たとい失敗しても、こんなぐずぐずした生活よりはずっとましだと思いました。それにはフラム号と別れてイヌぞりとスキーの力によって、一歩でも極地に近づくほかはないと考えたのであります。

この計画が発表されたが、もちろん、だれも反対はしませんでした。だが、もしナンセンが次の夏のうちに探険に成功してノールウェーに帰ることができて、フラム号がもどれなかったとしたら、どんなことになるのだろうか。

「ナンセンは、にげたのだ。」

「ナンセンはなかまを見すてたのだ。」

と、言われるかも知れません。だがこのまま極地に達しないで帰る気にはなれません。前進しよう。ただ前進しよう。

(二) そりに乗って

一八九五年三月十四日、ナンセンはひとりの隊員を連れて、氷の上をイヌぞりとスキーとで極地に向かいました。そこから極地までは四〇〇マイルもありました。初めの一週間は、まるで楽しい遠足のようでした。しかし、それからそんなわけにはいきませんでした。潮の力でもりあがった氷の山がこちらにも、こちらにもじゃまをしていました。それを回っていくこと

はできませんでした。といって、それを登っていくこともたいへん困難でありました。

寒さがはげしく、ふたりの着物はかたくこおって、手くびがすれてきずつくほどでした。うたたねしながら、スキーに乗ったまま前へのめりました。寒さで歯ががたがたになりました。イヌたちも、どんどん弱り始めました。死にもぐるいの戦いでした。しかし、極地でも三月の声を聞くと、零下二十度ぐらいになつて、太陽の明かるく照りかがやく日が続きます。だがイヌはもう氷の山の前にくると、一步も動こうとはしませんでした。

四月はもうきていたが、北に歩くのとほとんど同じ速さで氷は南へ流れておりましたので、そんなに北に来てゐるわけでもありませんでした。

四月八日の朝、北緯八十六度十四分にとり達してしまいました。八十七度まではいけると思ったが、不必要な冒険はやめることにしました。

極に着いたところで、今見ているものとちがったものはないはずだ、もうこれから北には陸地もないはずだと思ひました。高い氷の山に登つて、はてしなく続く氷の原を見わたしました。帰りの道は、氷がしばらくなめらかだったので、海をめざしての道はわりあいにはかどりました。もうすぐ家に帰れるような気持になりました。ある夜、ふたりとも時計をまくのをわすれてしまいました。みなさんは、こんなところで、どうして時計が必要かと考えることでしょう。ほんの数分間止まったのだったが、そのために、じぶんたちの位置を正確に測定できなくな

つて、その後一年間というものは、意外な苦勞をしなければならなかったのです。ナンセンの日記を開いてみましょう。

四月二十八日、陸地はたしかに近い。じぶんたちは、じきに水平線上に何ものかを見るだろう。

五月五日、十六びきしかイヌが残っていない。しかも陸地にはかくも遠い。(この日の観測は六十六度十五分であつたが、実はそれよりずっと北の七十二度であつた。)

五月九日、陸地のかげの見えないのは、いよいよ意外。

五月十二日、陸地を求めて水平線を調べるほかに何もせず。

五月二十一日、いまだ陸地のかげなし。これはすこし氣をもませる。

五月三十一日、きょうも陸地に達せず、それが見えもせず

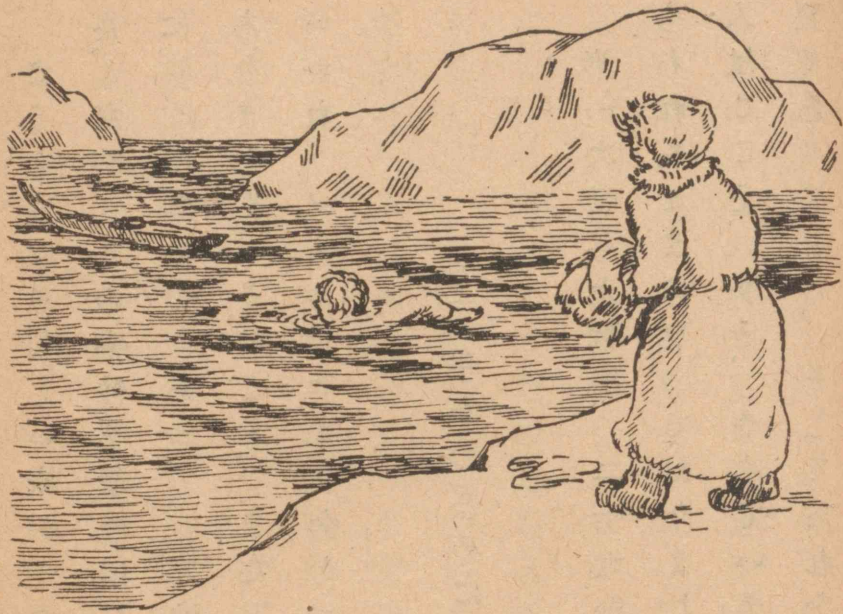
過ぎてしまった。

ナンセンは日記の中でどんなにあせっていたかを、こんなに述べています。六月になつても陸地は見えないし、食物はへるしイヌはもう三びきしかいませんでした。七月二十四日になつて山らしいものを発見したわけではありませんが、それを見ながら、長い極地の冬をこす用意をしなければならぬ季節になりました。九か月の間、石のようにかたい氷の家の中でクマのよきな生活が続けられました。くる日もくる日も、クマの肉とアザラシの油ばかり、二十四時間のうち二十時間もねてすごしたのであります。はだ着はすっかりはだにくつついて、いたくたしょうがない。動くとはだをこすつてすりむき、血が出るしまつてした。

一八九六年五月十九日、再びノールウェーへ道を求めて出発しました。氷の上では、そりにほをはって旅を続けました。氷のない水面に出ると、船をあやつりました。その船をおりて、その辺をぶらつき、少し休んでから旅を続けるつもりでありました。

「あつ、ナンセン、船が。」

氷にむすびつけておいたはずの船が流れ去ろうとしています。かれらの生命である品々を乗せたまま。ふたりはあわててとんでいきました。ナンセンは走りながら、外回りの着物をひきぬぎ、時計を手わたし、水中にザブンと飛びこみました。ほとんど絶望にみえました。もし成功しなければ、ふたりとも死ななければならなかったのです。足は寒くて動かなくなり、手はし



だいに弱まってきたが、やっとつかむことができました。けいれんのためにおぼれてしまうかと思われましたが、かろうじて、じぶんのからだを船の上に引きずりあげることができました。岸にこぎもどった時には、船から、はい出す力さえ残っていませんでした。すっかり着かえてから、乗せられるものはなんでも乗せて、どうやら寒さをふせぐことができました。

こうしたおそろしい旅がいつまで続くのやら、あてもなかつた。だが、この事件を最後にして、三日後、イギリスの探險隊に、ぐう然めぐりあって、死地をのがれ出ることができたのでありました。そのころ、またフラム号も三たびの極地の冬からのがれ、ノールウエーに向かつていました。

### (三) 平和のために

第一次世界大戦後、二十六か国五十万以上のものが、まだとらわれたままになっておりました。戦いは終つたが、これらの人はごごえ、うえ、やんでいました。これを救うのは、国際連盟でありました。そしてだれかこの責任者として選ばれなければ

ばなりませんでした。その人はじぶんの正しいと思つたことは世界のだれの前でも言える人でなければなりません。

当時、ナンゼン博士をおいてほかに適当な人はありませんでした。ナンゼンは固くことわつたがどうしてもいれられませんでした。人々の信望にこたえて、かれは人道のために立ちあがりました。そこには予想外の困難がまつていました。だが北極探險のころの熱情をもって前進に前進を続けました。

やがてかれの努力の結果はむくいられました。

「ヨーロッパ大陸には、ナンゼンのなした事業に対する喜びで妻や母のなかなかつた国は一つもない。」

とまで言われるほどになりました。

ほりよのあとに、救いの手を求めている数多くのひなん民が

ありました。この問題の処理も終らないうちに、悪いことには、ロシアには、ききんがおそつてきました。ボルガ河の水はかれ、どこの井戸からも水は出てきませんでした。小鳥はついでに、実を発見することができませんでした。農民はいく千も群をなして、やけつく平原を横切つて移動を始めました。

三千万の人たちが、うえ、そのうち八百万はおさない子どもでありました。四百万トンの穀物が必要とすれば、それを運ぶのに、五十車りようずつの列車が八千もいります。食物は冬にならないうちに村々に届いていなければなりません。そうでなければ、数百万のものは春を待たないで死んでしまうことでしょう。

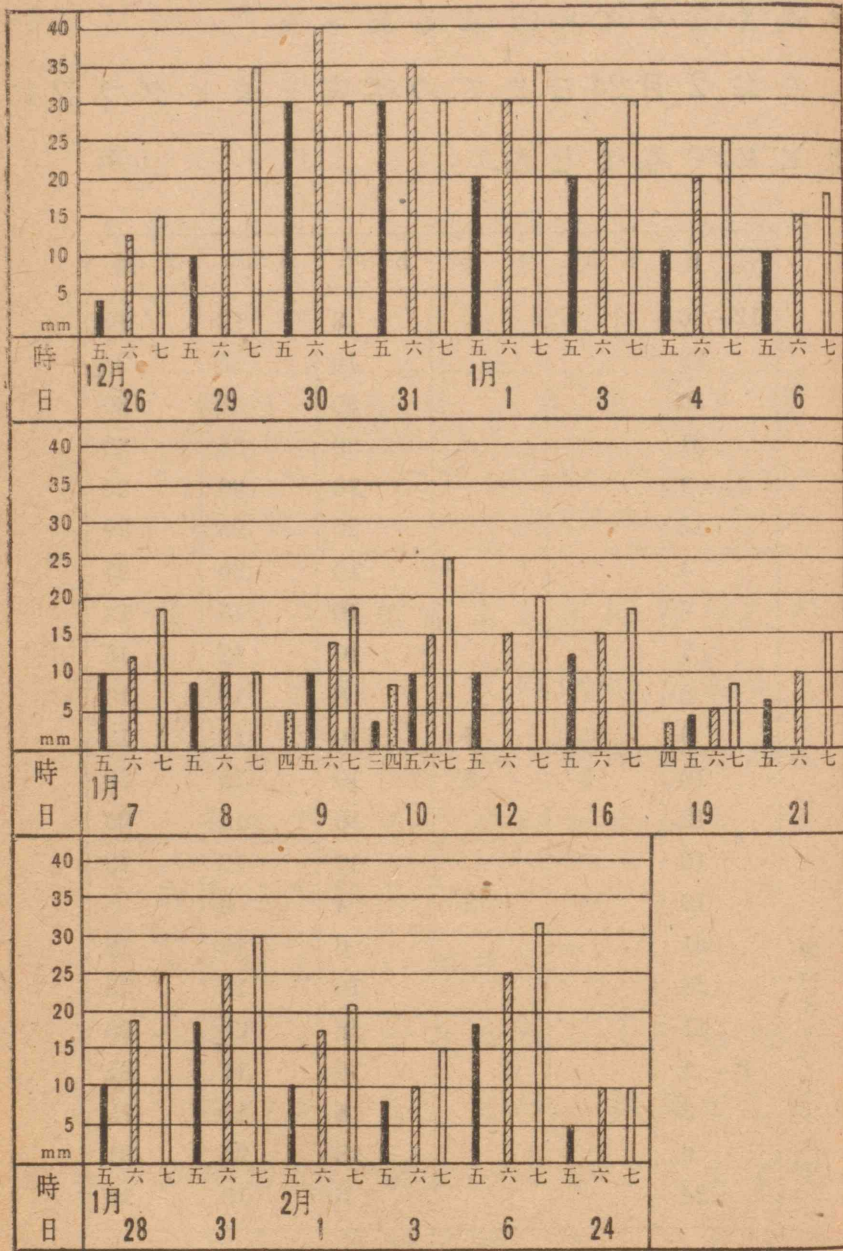
ヨーロッパの人々を説きまわり、アメリカでも金をつのりました。そこには考えられないような悪口とじやまとが待ちぶせていました。だが、前進しました。そして、しかも成功というわけにはまいりませんでした。

「この場所を見るのはじぶんが最初だ。」と、言える所は地球上にわずかしか残っていないかもしれないが、ナンセンのきわめた科学の世界、国際的同胞愛は、いつまでもいつまでもゆきづまりがありません。

かれは偉大な人間でありました。よるべなき数多くの人を救いました。

絶望し、さまよい続ける人たちに希望と勇気とをあたえました。

かれは、やがて戦争のなくなる日のくることをかたく信じな



がら、かれの偉大な生がいをとじたのは、一九三〇年五月十七日でありました。



時におこしてね。”とたのんでおいたのだった。

3時：しもばしらはまだできていず、白いしもが積もり、土の高さは3ミリメートルぐらいだった。

	4時	5時	6時	7時
高さ	0.8センチ メートル	1センチ メートル	1.5センチ メートル	2.5センチ メートル
温度	零下2度		零下5度	

この調べていちばんふしぎに思ったのは、いままでしもばしらは夜の間にはできるものとばかり思っていたのに、朝早く、だんだんのびるものであることがわかった。このことを先生にお話したら、

“それはすばらしい発見だ。”

と言われて、すっかりうれしくなった。

もう一つわかったことは、温度としもばしらとの関係で、温度は7時ごろまでだんだん低くなり、それに従って、しもばしら

も高くなるということだった。

なお2月24日までの研究を表とグラフにまとめてみました。

月日	3時	4時	5時	6時	7時
12-26			3	12	15
29			10	25	35
30			30	40	30
31			30	35	30
1-1			20	30	35
3			20	25	29
4			10	20	25
6			10	15	18
7			10	12	18
8			8	10	10
9		5	10	13	18
10	3	8	10	15	25
12			10	15	20
16			12	15	19
19		3	4	5	8
21			6	10	15
28			10	18	25
31			18	25	30
2-1			10	17	21
3			8	10	15
6			18	25	31
24			5	10	10

(単位ミリメートル)

おなじ日にかたい土についても調べたものがあるので、これも書きぬいてみる。

5時：かたい土はまだしもばしらがたっていないで、細かいしものかたまりが積もっていて、8ミリメートルぐらいだった。

6時：高くなって1.9センチメートルになりしもばしらができていた。どうしてかたい土のほうが低いのだろう。

7時：もっと高くなり、2.4センチメートルになっていた。かたい土は、やわらかい土よりのびかたがおそい。

8時：7時半に、はかった時は、7時と同じくらいで、8時ごろからとけ始めた。

1月7日(火) くもり

きょうは先生がおっしゃったとおり温度もはかってみた。

	5 時	6 時	7 時
高さ	1 センチメートル	1.3 センチメートル	1.3 センチメートル
温度	3 度	2 度	1 度

1月9日(木) 晴

4時：けさは土がさらさらだった。そしてなにかがちかちか光っていた。つかんでみると、つめたいものが手にさわった。それがきつと光っているのだろう。ほってみると、いろいろな形をしたしもばしらが5ミリメートルくらい光っていた。温度0度。

	5 時	6 時	7 時
高さ	1 センチメートル	1.3 センチメートル	1.8 センチメートル
温度		零下1度	零下1度

1月10日(金) 晴

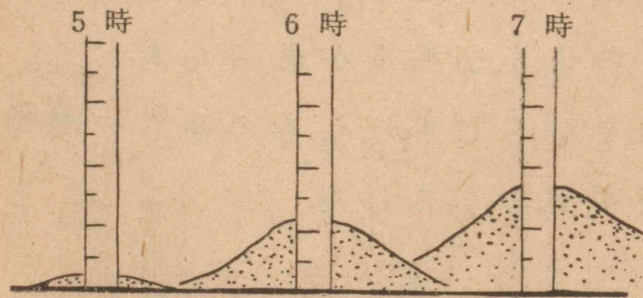
きょうはおかあさんにおこされて“まだ暗いじゃないの。”と言うと、“そうよ、3時ですもの。”と言われた。

そうそう、ゆうべねる時に、“あしたは3

びおきた。外へ出ると急に寒くなって身ぶるいがした。5時に見た時は、ただ土の表面が、ちかちかと光っていて、少し土がふくれているだけだった。

6時に見ると、さっきより土がふくれあがっていて、1.2センチメートルのところまで土がもりあがっていたが、しもばしらはまだたっていないかった。

7時には、1.7センチメートルまでふくれあがっていた。しもばしらはとうとうたななかった。



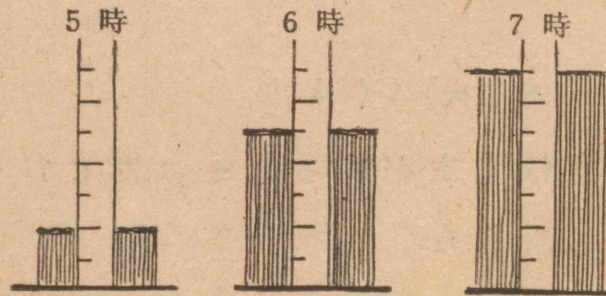
12月29日(日) 晴

おこされて外に出てみるとずいぶん寒かった。5時、もうしもばしらができていて、うへのほうの土の部分とあわせて、長さが1センチメートルぐらいだった。

6時：だいぶ高くなって、2.5センチメートルになっていた。わたしは朝になってから、たつのかしらと思った。

7時：こんどはもっと高くなって、3.5センチメートルになっていた。1時間に1センチメートルものびたことになる。

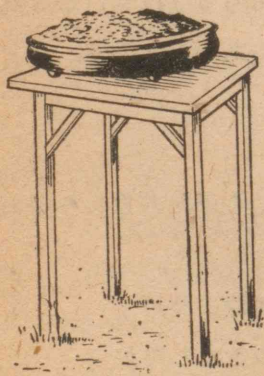
8時：それから7時半にもう一度はかったが、かわりなく、8時ごろからとけ始めた。



## 七 わたしたちの研究

わださんはしもばしらの生長について調べました。

まずしもばしらができるのには水分が必要だが、その水分はどこからでてくるだろうかということ調べてみました。からからにかわいた土を入れたうえ木ばちを野天に持ち出しておいてしもばしらがたつかどうかを観察しました。うえ木ばちの底のあなから水分がはいらないように、高さ1メ



ートルほどの木の台の上におきました。こうして8日ばかり見ていたが、付近の地にはしもばしらがたつのに、うえ木ばちにはただ表面に、白いしもがおりてい

るだけで、しもばしらはたちませんでした。

そこでこんどは、ある晴れた日の夕方、ひしゃくに半分ほどの水をじょろでうえ木ばちにかけておいてみました。するとあくる朝、うえ木ばちには高さ1センチメートルほどのしもばしらがみごとにたっていました。この実験から、しもばしらは地中にある水分がのぼってきてできるものであり、地中の水分がなくなればたたなくなる、そしてしもは、土の中に水分がなくてもできるから、これは空気中の水分によってできるものだということがわかりました。

以上のような発表があったあとで、日記を読みながらしもばしらの高さの研究について説明がありました。

12月26日(木) 晴

初めてなのでうれしいような気がしてと

てみましょう。

## 2. 学ぶ心

### 図書室

○おもしろくて活動的なものだけに心をひかれないで、この詩のように、静かな中にいきいきと心が動いているものにも心をとめて、わたしたちも詩を作りましょう。

### 学校へいく道

○毎日通う登校の道でも、長く感じたり短く感じたりするのはなぜでしょう。

○この詩を読んだ感じをまとめてみましょう。

○終りの方の表現のしかたに注意しましょう。

## 3. 話す喜び

○声を出さないで、口の動きだけでことばがわかるかどうか。みんなで作ってごらんください。かがみで見るのもおもしろいでしょう。

○目の見えない人たちは、どんなにして読んだり書いたりするでしょうか。

○この話は“クオレ”という本の中にあります。“クオレ”の中にはめくらの人々のことも書いてありますから読むといいですね。

## 六 前進

○あなたたちはどんな人がりっぱだと思いますか。この話を読んで考えてください。

○むずかしいことば、ことに漢字を組みあわせたことば（じゅく語）のむずかしいのが出ています。まず、それにとらわれない

で最後まで読みとおしてごらんください。

○次の年代とことがらとがむすびつくように読んでごらんください。

1. 1861年
2. 1893年7月21日
3. 1895年4月28日
4. 1896年5月19日
5. 1930年5月17日

○次のことに答えられますか。

1. この話に前進というだいがつけられたわけ。
2. なぜフラム号とわかれたのか。
3. なぜ86度17分のところでもどってきたのか。

## 七 わたしたちの研究

○一と月も二た月も、一つのもを続けて観察すると意外なことが発見できます。その観察を日記にしておいて、あとで表、グラフなどに整理してみるとまたおもしろいことに気づくことがあります。

○じぶんの研究をたくさんの人にわかってもらうように、ことばにより文字によってあらわすことはむずかしいことです。

○次のことに答えてごらんください。

1. しもばしらの立つわけ
2. やわらかい土とかたい土とでしもばしらのちがいのちがいの
3. 温度としもばしらの関係
4. しもばしらがぐっと大きくなるのは何時ごろか

○このグラフや表をみてどんなことに気がつきましたか。

の三つを考えなければなりません。

- “時”は何時間というような短いのもあれば、何年というように長いものもあります。いつごろとぼんやり示す時もあります。
- “所”もはっきり示すのもあれば、どこと行ってきまっていな場合もあります。ただ“所”が一幕一幕ずんずん変わっていつて、幕のあけしめがあまりはげしいのは、よくありません。
- “出て来るもの”については、かっこうや着物や、人間だと年齢などを示す場合もあります。

○劇が童話などちがう点を考えてみましょう。

会話がおもになっていること。

場面が多くないこと。

説明によらず、動作やせりふでわかるようにすること。

○劇をおもしろくするには、興味の高まるやまが必要です。

○劇の材料は、ふだんのできごと、伝説、童話、伝記などいろいろあります。これらを利用して、劇のきゃく本を作りましょう。

### 1. とし子の劇

○この劇のきゃく本を、前に書いたことによって、ひひょうしてみましよう。

材料はどんなことから取ったでしょう。

すじがきの上で、やまと思われものがありますか。

せりふや動作は、うまくやれるようにしくまれていますか。

○一度実演してみましよう。そして、ぐあいの悪いところがあったら、どんなふう直したらいいか、考えてみましよう。

### 2. 助けあい

○この第一幕は、とみた・ひろゆき（富田博之）先生の作品で、

インソップ物語の中の一つを劇にしてみたものです。

○この劇は、ふつうの劇と少し変わった点がありますね、それはインソップおじさんの登場することです。

○インソップおじさんの登場は、この劇に対して、どんなはたらきがありますか。

○ネズミ、カラス、カメはそれぞれどんな性質を持っていると思われまうか。

○それに応じて、せりふの言いかたに気をつけてください。また、お面か着物もくふうしてください。

○第二幕目を作ってみましよう。そのための注意は本文の中にあります。

○こっけい味を加えるのもおもしろいです。

## 五 学校ものがたり

### 1. うつりかわる

○この文を読んで、学校のどんなことが、どんなふうにならなって来たか、おもなことがらを帳面に書いてみましよう。

○わたしたちの学校のうつり変わりについて、みんなで共同して調べてごらんささい。

○いったい、学校というものはいつごろからあったのでしょうか。また、このころの学校のようなはどんなだったのでしょうか。

○新しい学校や、外国の学校についても知りたいですね。

○この文は、会話だけで作られているから、話のやりとりに気をつけてごらんささい。

○学校のいろいろのへやや場所などの名まえを、みんな書き出し

## 二 科学の世界

## 1. 小さいころのフェアブル

○この文を読むと、小さいころのフェアブルについて、どんなことがわかりますか。

○みなさんも、この話のように、ふしぎに思ったり、びっくりしたり、喜んだりした経験があるでしょう。それをみんなで話しあってください。

## 2. クモを見る

○この文は、実際にはなかなかこみいってむずかしいことがらを、たいへんおもしろくわかりやすく書きあらわしています。特に、どんなことがそうだと思いますか。

○わかりやすい文ということについて話しあってみましょう。

○この文の中に、実験してみてわかったことがいくつもありますね。それを、順にみんな帳面に書いてください。

○この文は“フェアブルのこん虫記”にあります。その本があったら、みんなで読みましょう。

## 3. ルーサー・バーバンク

○バーバンクの、他の植物改良家とちがっているやりかたについて話してください。

○バーバンクが公園で話した話の中で、いちばん強く言っていることは何ですか。

○みなさんや、みなさんの知っている人の中に、植物の改良をしている人がいたら、お話を聞きましょう。

## 三 自然の美

## 1. 初雪

○この話にでてくる人はだれとだれですか。

○その人たちの話のところをわけあって読んでごらんください。

○つぎのことに答えられますか。

1. いつころか

2. どんなところか

3. 何をしたのか

4. この話を読んでどんな気持ちがしたか

## 2. アルプスの山のむすめ

○おじいさん、ハイジ、ペーテルの三人の性質というものがよくわかります。“初雪”のところとくらべてごらん。

○おじいさんの説明は小さいハイジにわかるようにいっているのですから、そのつもりで読んでください。

○あなたはこの話のどこが好きですか。

○アルプスの山のむすめの全部を読んでごらんください。

## 四 わたしたちの劇

劇のきゃく本を作るといって、たいへんむずかしいようですが、形をおぼえてしまうと、だれにも作れます。つぎに、その時のきまりや注意を書いてみます。

○劇には

時

所

出て来るもの

## 学 習 の て び き

### 一 学級新聞

- あなたがたは新聞を作っていますか。それは書いたものですか、すったものですか。かべ新聞ですか。みんなに配るものですか。
- あなたがたが新聞を作り始めたのは、何年生の時ですか。それはどんなことから作るようになったのですか。
- まだ新聞を作っていない人は、としおたちの学級新聞を参考に、新聞を作ることを考えてみましょう。

#### 1. 小さなノート

- これは、“学級新聞”の前奏曲のようなものです。
  - としおは小さなノートにいろいろなことを書いていますが、どんな目的でしょう。
  - あなたがたも、としおのようにノートを用意して、気がついたことを書きつけておくことにしましょう。そうして、ものを見る目と、考える力とをのばすことに心がけてください。
- 詩、はい句、感想、スケッチ、できごとなど、いろいろありますね。

#### 2. 学級新聞を作ろう

- としおたちは、どんなわけで学級新聞を作るようになったのでしょうか。
- 学級新聞をどんなふうにして作るようになりましたか。
- 新聞委員の分たんはどんなに分けられましたか。
- 新聞委員たちはどんなことを相談しましたか。
- 新聞の記事にはどんな種類をきめましたか。このほかにも考え

られますか、また世の中の新聞は、そのほかにどんなことを取りあつかっていますか。

- 編集会議ではどんなことをしましたか。
- 編集係はどんな希望を組の人たちに話したらよいでしょう。
- みなさんが、新聞委員を選ぶとしたら、どんな人を選びますか。
- 新聞記事を書くには、どんな心がけが必要だと思いますか。

### 3. 学級新聞

- これはとしおたちの学級新聞第一号です。
- どんな種類の記事があるか、分類を試みましょう。また、その中にどんなものがのっているか、さらにこまかくわけてみましょう。
- “週間ニュース”と“教室のまど”をくらべてみて、どちらがいますか。
- “わたしたちの声”はどんなものを集めたものですか。
- “詩”はいつごろのことでしょう。あたたかい感じがどこに表われていますか。

### 4. みんなの声

- これは何の話しあいですか。何のためにやったものですか。
- この中で、新聞委員と思われる人はだれだれですか。
- 編集、印刷、そのほかのことについて、どんなひひょうや希望がありましたか。
- みなさんなら、この上さらにどんなことをひひょうしたり、希望したりしますか。



身ぶるい.....(18) やっかい.....37  
 シルク.....79 破け(て).....43  
 むくい.....60 敗れ.....18  
 むずかしい.....7 やまびこ.....85  
 むすめ.....72 やり方.....54  
 むちゅう.....119 やんで(病気で).....134  
 めいわく.....100 勇気.....137  
 めぐりあって(う).....134 タヤキ.....59  
 めだつ.....46 ゆきづまり.....137  
 めりこんだ.....5 ゆきつもどりつ.....126  
 めんどう.....36 指輪.....42  
 メンドリ.....36 よきょう.....19  
 めんみつ.....56 よけい(に).....68  
 燃えてる(る).....74 予想外.....135  
 もがいて(く).....48 予定.....13  
 も草.....40 ラッパ.....34  
 目的地.....39 りこう.....15  
 もどり.....99 両親.....36  
 ものさし.....56 両ミ.....74  
 モミ.....74 ルーサー.....58  
 モモ.....58 もらいましよう.....101  
 文句.....20 留守番.....99  
 やけつく.....25 列車.....136  
 やす子.....29 ろうあ学校.....112  
 野生.....53

ロバ.....38  
 ロビンソン・クルーザー.....121  
 訳.....47  
 わけへだて.....124  
 わざわざ.....25  
 綿.....22  
 わだ(さん).....(16)  
 わらい話.....23  
 わりあい.....130  
 わりつけ.....30  
 悪口.....80  
 われがち(に).....39

漢字 ○は当用漢字です

余(5) 容(7) 束(7) 誤(8) 舍(9) 側(9) 材(12)  
 料(12) 浜(13) 予(13) 芝(13) 浦(13) 欲(15) 億(16)  
 業(16) 団(16) 貪(16) 完(17) 審(18) 査(18) 敗(16)  
 個(19) 務(19) 討(20) 論(20) 句(20) 従(20) 農(22)  
 綿(22) 軽(22) 泉(24) 評(28) 判(28) 限(32) 届(33)  
 預(34) 鼻(34) 満(36) 冒(38) 険(38) 宝(41) 破(42)  
 得(45) 眼(47) 植(51) 絶(56) 測(56) 功(57) 招(59)  
 導(59) 宗(62) 塩(65) 牧(74) 燃(74) 劇(82) 齡(82)  
 幕(82) 迷(86) 酒(92) 留(99) 演(103) 卒(105) 操(108)  
 標(108) 衛(108) 設(108) 備(108) 舌(116) 刻(123) 探(124)  
 検(124) 隊(124) 潮(124) 漂(124) 密(125) 厚(125) 居(125)  
 票(125) 織(125) 困(130) 零(130) 緯(131) 確(131) 述(133)  
 盟(136) 責(136) 任(136) 博(137) 固(137) 妻(137) 処(138)  
 河(138) 穀(138) 胞(139) 偉(139)

近道.....48  
 地中.....(17)  
 千葉県.....17  
 血まめ.....39  
 チーム.....18  
 茶がま.....24  
 着手.....17  
 潮流.....124  
 著書.....33

ついばむ.....136  
 つかむ.....68  
 つけもの.....62  
 つっこみ(む).....37  
 妻.....135  
 つみためて(る).....78

ディオゲネス.....25  
 手くび.....129  
 デッキ.....125  
 鉄びつ.....30  
 鉄ぼう.....19  
 手まね.....14  
 てる子(さん).....10  
 デルフリ.....72  
 手わたし.....133  
 伝記.....33  
 電信線.....50  
 電報.....23

討議.....124  
 同時(に).....55  
 投書.....7  
 とう達.....129  
 投票.....124  
 同胞愛.....137  
 討論.....20  
 とおりこして(す).....68  
 得意.....45  
 特長.....55  
 独特.....54  
 どけて(る).....40  
 とけきれない.....64  
 とぎされて(る).....123  
 とじこもって(る).....49  
 土台.....17  
 どだい石.....9  
 どっしり.....91  
 届く.....34  
 とび色.....73  
 とぼしい.....37  
 土間.....63  
 —とも.....19  
 とらえよう(と).....40  
 取り残され(て).....99  
 どろ.....40

内容.....7  
 なすがまま(に).....123  
 ななめ.....48

ナプキン.....99  
 鳴らし(す).....14  
 若い.....33  
 日光.....59  
 にゅう牛.....13  
 ニューズ.....7  
 にらんで(む).....5  
 にんたい強く(い).....15  
 ぬっ(と).....25  
 ネズミ.....88  
 熱情.....135  
 熱心さ.....102  
 ねばって(る).....48  
 年齢.....82  
 農園.....57  
 農林一号.....17  
 野ギク.....53  
 望みどおり.....56  
 野天.....16  
 のめり(る).....129  
 ノールウェー.....121  
 のろい.....89  
 はいく.....29  
 バインアップル.....58  
 はかどり(る).....130

はぐらかした(す) 100  
 はげむ.....111  
 はだ着.....132  
 バッタ.....44  
 はてしなく.....130  
 話しあい.....9  
 話の泉.....24  
 花ぞの.....61  
 はねまわり.....73  
 はまって(る).....98  
 はやして(す).....88  
 バラ.....75  
 はらがけ.....24  
 春めく.....109  
 ばんごはん.....79  
 火うち石.....24  
 ひきずって(る).....5  
 ひきぬぎ(ぐ).....133  
 日ざし.....109  
 ひし(と).....113  
 びっこ.....5  
 P・T・A.....102  
 ひどい.....47  
 ひとえ.....52  
 ひと通り.....118  
 ひとりぎめ.....124  
 ひなん民.....135  
 標本室.....106  
 漂流生活.....123

ピロード.....36  
 フェアブル.....33  
 ふうとう.....8  
 付近(の).....(17)  
 ふくらます.....22  
 不足.....65  
 プタ.....34  
 ぶつかつた(る).....124  
 ブドー酒.....92  
 フライ.....90  
 ブラウン・  
 スイス種.....13  
 ぶらさげた(る).....13  
 ぶらつき(く).....132  
 フラム号.....123  
 フリッチョフ・  
 ナンセン.....121  
 ふりまいて(く).....65  
 ふるいおとし(す).....78  
 古めかしい.....88  
 フレーフレ.....18  
 文芸.....7  
 分たん.....7  
 平原.....136  
 平ぼん.....32  
 ベーテル.....72  
 編集.....7

放課後.....7  
 ほうちょう.....24  
 北緯.....129  
 欲しがる.....15  
 ぼ集.....18  
 ポテト.....58  
 ポマト.....58  
 ほりょ.....135  
 ボルガ河.....135  
 まえまえ.....6  
 まし(だと).....127  
 待ちぶせ.....38  
 まないた.....62  
 まぬけ.....47  
 招かれた(る).....59  
 迷子.....87  
 満足.....36  
 見うけられる(る).....20  
 —みえて.....49  
 身じまい.....79  
 みすばらしい.....26  
 みだし.....11  
 みち子.....29  
 導いて(く).....59  
 みっちり.....118  
 ミツバチ.....33  
 みのり.....110  
 見はり.....98

カ	プ	62	近	眼	47	心	が	け	29
花	粉	54				個	人		19
か	べ	新	区	切	り	こ	な	い	だ
6		聞	55			こ	の	ほ	ど
花	べ	ん	く	ぐ	り	こ	の	ほ	ど
53			68			こ	の	ほ	ど
カ	マ	キ	ぐ	ず	ぐ	コ	ハ	マ	ギ
5			20			53			
が	ま	ん	く	た	び	ご	ほ	う	び
33			84			18			
か	み	つ	い	た	り	小	屋		76
47			103			7			
カ	メ		口	ぶ	え	ご	ら	く	
89			76			7			
カ	メ	キ	く	ぼ	み	こ	わ	さ	れ
91			37			100			
カ	モ	シ	グ	リ	ン	根	気		56
88			121			56			
か	ら	し	グ	ル	ー	こ	ん	虫	記
10			6			33			
カ	ル	カ				困	難		128
13						128			
か	ろ	う	毛	糸		さ	い	ほ	う
133			46			118			
関	係		け	い	れ	先	ご	ろ	
12			133			18			
か	ん	じ	け	た	か	作	品		18
118			57			18			
完	成		家	来		さ	そ	う	31
17			25			31			
き	き	ん	原	こ	う	さ	び	し	が
135			8			15			
キ	ク		原	紙		57			
52			30			57			
器	具		こ	う	意	さ	ま	よ	い
123			13			137			
記	事		公	園		137			
7			59			137			
き	し	っ	こ	う	さ	む	け	さ	133
126			74			133			
記	者		校	舎		サ	ラ	ダ	91
12			9			91			
気	の	せ	交	配		塩			65
94			54			65			
教	室		こ	う	ら	潮			123
10			96			123			
共	通		こ	ぎ	も	し	お	れ	て
58			133			78			
共	同	ぼ	刻	々	(と)	し	か	も	54
10			121			54			
き	ょ	う	国	際	連	じ	き		130
106			134			130			
極	地		穀	物		時	期		8
131			136			8			
切	り	さ	こ	ご	え	事	業		135
121			134			135			

じ	く	40	退	い	た	前	進	123						
し	く	み	し	り	ょ	せ	ん	風	機					
50			58			23								
し	こ	ま	れ	(る)		宗	平	62						
118						62								
シ	ジ	ア	審	査		測	定	130						
112			15			130								
使	者		信	望		そ	こ	こ	38					
14			135			38								
従	お	う	水	温		組	織	124						
20			124			124								
死	地		水	深		卒	業	生	103					
134			124			103								
実	演		水	分	(16)	そ	り	123						
101			56			123								
し	の	ん	—	す	え	題		19						
38			56			19								
芝	居		す	が	す	第	一	次	世	界	大	戦	134	
90			59			134								
芝	浦		す	ぐ	れ	大	学	121						
13			56			121								
—	四	方	す	じ	が	大	こ	う	物	92				
55			82			92								
し	ぼ	う	す	っ	き	た	い	し	た	こ	と	(は)	19	
13			54			19								
し	も	柱	ず	ば	ぬ	け	て	(る)	44					
64			44			44								
社	会	事	ず	ぶ	っ	(と)	5							
16			5			5								
シ	ャ	ス	ス	ポ	ー	ツ	24							
52			24			24								
デ	ー	ジ	す	ま	す	94								
52			94			94								
シ	ャ	め	す	い	む	き	(く)	132						
73			132			132								
車	り	ょ	す	わ	り	こ	ん	で	(む)	25				
136			25			25								
手	芸													
118														
首	相		性	質		15								
14			15			15								
出	演		生	長		16								
19			16			16								
種	目		生	物		124								
19			124			124								
生	が	い	精	密		123								
138			123			123								
消	防		責	任	者	134								
18			134			134								
処	理		設	備		106								
135			106			106								
シ	ョ	ル	絶	望		133								
112			133			133								
じ	ょ	ろ	せ	ど		63								
(17)			63			63								
シ	ョ	ロ	世	話		72								
44			72			72								
知	ら	ん	全	員		8								
45			8			8								



Blue ink smudges at the top of the page.

Faint, illegible text within a rectangular border.

Faint, illegible text within a rectangular border.

庫  
0  
70

広島大学図書  
0130449670  


おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書から  
より良質のもの（新教科書用紙）を使  
用することになって居ります。